

博士論文

論文題目 古典満洲語属格標識-iの研究

氏名 早田 清冷

# 古典満洲語属格標識-iの研究

早田 清冷

## 目次

序章	1
0.1 はじめに	1
0.2 本論文の構成	3
0.3 略号	4
0.4 本稿で用いる表記	5
第1章 導入	7
1.1 言語について	7
1.1.1 満洲語の概要	7
1.1.2 17, 18 世紀頃の状況	9
1.1.2.1 満洲文字創成	12
1.1.2.2 無圏点満洲文字時代	12
1.1.2.3 満洲文字改革	14
1.1.2.4 順治年間(1644 年 - 1661 年)	16
1.1.2.5 康熙年間(1662 年 - 1722 年)	18
1.1.2.6 その後	20
1.2 本稿で用いる資料	22
1.2.1 『満文三国志』と『満文金瓶梅』について	23
1.2.2 『満文三国志』の同時代性の限界	24
1.3 本研究に関わる文法上の重要事項	26
1.3.1 満洲語の格	26
1.3.1.1 属格標識と具格標識	26
1.3.1.2 格標識無しの形	35
1.3.1.3 対格	36
1.3.1.4 与格	37

1.3.1.5 奪格	38
1.3.1.6 沿格	39
1.3.2 名詞と形容詞の区別	39
1.4 小括	42
<b>第2章 -iの表記と形態に関する問題</b>	<b>43</b>
2.1 ng の後で格標識-iを ni と綴るのは正書法上の問題か異形態か	43
2.1.1 ng の後の格標識-iに関する問題の所在	43
2.1.2 n の前であれば固有語中に ng は存在する	45
2.1.3 語末 ng と語末 n の後の例外的な綴り	45
2.1.4 2.1 節のまとめ	48
2.2 -i の分かち書きについて	50
2.2.1 -i の分かち書きに関する問題の所在	50
2.2.2 分かち書きされない具格の例	51
2.2.3 属格と具格の比較	52
2.2.4 2.2 節のまとめ	54
2.3 小括	55
<b>第3章 「動詞未完了連体形+-i」および「助数詞(的名詞)+-i」の偏った分布</b>	<b>56</b>
3.1 本章で扱う用法	56
3.2 分布	59
3.2.1 動詞未完了連体形+-i	59
3.2.2 助数詞(的名詞)+-i	60
3.2.3 分布の偏り	61
3.3 『満文金瓶梅』(1708年序)との比較	62
3.4 小括	63

第4章 「同格の属格」について	64
4.1 「同格の属格」	64
4.1.1 「同格の属格」という記述の問題点	66
4.1.1.1 属格の用法としての「同格」の定義不足	66
4.1.1.2 現代日本語のコピュラ連体形「の」とは異なる	67
4.1.2 本稿の立場	71
4.2 属格主語とコピュラ	71
4.2.1 従来 of 記述	71
4.2.2 コピュラの未完了連体形	73
4.2.3 ゼロコピュラの属格主語	77
4.3 「同格の属格」も主語用法である	79
4.3.1 一般的な従属節の属格主語として説明できる例	79
4.3.2 主要部内在型関係節の属格主語として説明できる例	81
4.4 小括	85
第5章 -i に続く [数詞 + nofi 「人」] について	86
5.1 共時態における nofi の特殊性	87
5.2 通時的視点	95
5.3 小括	96
第6章 結論	104
語彙集	106
参考文献	123
あとがき	126

## 序章

### 0.1 はじめに

本稿は古典満洲語(以下原則として満洲語と呼ぶ)の属格標識-i/ni について分析するものである。満洲語の属格標識-i/ni は一見して他の狭義のアルタイ諸言語(日本語などを含まない、チュルク、モンゴル、ツングースの三グループ)の主要な言語の属格よりも多機能に見える。これが「広義の所有関係」<sup>1</sup>等の、一般的な属格の機能の範囲で説明できるものであるのか、この属格標識と同音の具格標識-i/ni と共に、より一般化して記述し、句と句を繋ぐだけの、一般的に属格と言われるものとは全く別の何かであるとすべきものなのか、という疑問に対して、文献からわかる範囲で、しかし可能な限り合理的な回答を示す事を試みる。特に「広義の所有関係」では説明がつかない「同格の属格」の解釈に紙幅を割いている。

本稿の興味を中心は満洲語の共時論であり、必要に応じて清代の満洲語という言語の範囲内で若干の通時的な考察も行うに留まるが、満洲語の属格標識の多機能性は、より長い期間を対象にしたツングース語族全体の通時論や、属格に対する類型論的問題にも新たな知見をもたらす非常に魅力的な研究対象であると思われる。満洲語がモンゴル語の強い影響を受けて成立した言語である事はよく知られているが、モンゴル語には満洲語程多機能な属格は存在しない。満洲語における属格の存在に関しても田村(1991)、山越(2010:111)などで、その原因がモンゴル語との言語接触である事が示唆されているが、具格標識を属格標識と同音だが機能の異なる別の形態素であると考えても、満洲語の属格標識の使用範囲はモンゴル語のそれを超えているように見える。ツングース祖語に属格<sup>2</sup>があったか否かは不明であるが、満洲語に元々無かった属格が存在するようになった、あるいは、満洲

---

<sup>1</sup> もちろん多くの言語に見られる属格の用法について、「全体と部分の関係」、「親族関係」といったものまでを広い意味での「所有関係」であるとする説明にも問題がある事は知られている。しかし、そのような多くの言語に見られる現象のより良い分析を行うには、資料が限られていて現在母語話者もいない言語である古典満洲語は魅力的な研究対象とは言いがたい。本稿は典型的な所有とは異なる属格標識の用法を優先して分析するものである。

<sup>2</sup> Benzing (1955: 79)の復元では具格の復元形"ǰ"に対して音形の異なる復元形で"Genitiv \*+ŋī"とある。現在ツングース諸語の多くの言語に属格は無い。

語以外の主要なツングース諸言語において元々存在した属格が失われた，という言語の変化の経緯という問題に対しても，満洲語の属格の詳細な分析が新たな手がかりをもたらす事になるであろう。

類型論的にも，属格的なもの(補部が主要部の所有者である事を表す際に最も一般的に用いられる連体修飾手段)が同格的にも用いられるというのは珍しいという指摘がある。風間(2013a)では日本語の様々な所有表現の例を，スペイン語，ドイツ語，ロシア語，ペルシア語，ウルドゥー語(以上インド・ヨーロッパ語族)，ナーナイ語，モンゴル語ハルハ方言・ホルチン方言・ブリヤート方言(以上アルタイ諸言語)，フィン語(ウラル語族)，アラビア語(アフロ・アジア語族)，朝鮮語(系統不明<sup>3)</sup>)，マレーシア語，インドネシア語，マダガスカル語(以上オーストロネシア語族)，中国語(シナ・チベット語族)における同様の表現と対照して，属格や所有に関わる様々な表現における差異を述べているが，「「同格」は日本語以外では属格等を使用することができないようである。その表示はほとんどの言語でもっぱら並置に拠っている」(同: 111)と述べる。トルコ語でも属格は「2つの名詞が表す対象が2つのべつべつのものでないと使えないようだ」(林 2013:58)という。満洲語には，かなり生産性が高いと思われる「同格の属格」の用法が存在するのだが，それが現代日本語における「同格のノ」と同じ現象とは考えられない事が本稿の議論にて示される。

---

<sup>3</sup>アルタイ諸言語に含めて挙げられる事もあるが，ここでは風間に従う。

## 0.2 本論文の構成

本論文は序章および第1章から第6章までの計7章と論文中の満洲語の簡単な語彙集からなる。

第1章では、満洲語について重要事項を述べ、分析する資料と格標識について説明する。

第2章では格標識の表記および形態上の問題をあつかう。

-iがngで終わる語の後ではniと綴られる事に関して、単なる正書法上の工夫ではなく、当時の音声言語で起きていた現象を反映した綴りであると考えられる事を述べる。

次に、属格と具格の表記上の異同の有無(分かち書きの有無)を検証し、顕著な差は見られない事を指摘する。

第3章では、属格標識の一部の用法において『満文三国志』の中で分布に偏りが見られる事、その偏りの一部は満洲語の時代差が原因である可能性がある事を報告する。

第4章では、第一名詞句が「主要部と同一のモノ」である場合に-iが用いられる例について検証し、この「同格の属格」とされる-iが主語用法として説明できる事を示す。はじめに、早田輝洋(2006)の記述に反して、コピュラの未完了連体形は、少なくとも名詞述語の後ではゼロ(音形なし)になる事を示す。次に、従属節において、このゼロコピュラの主語は他の発音される動詞の主語同様に属格形で現れうる事、すなわち、津曲(2002)の記述にある条件における属格主語以外のものとして、表層形において名詞句終わりの節の主語も属格形で現れうる事を示す。従って、満洲語の「同格」の属格という現象も構造としては「NP<sub>1</sub>-i + NP<sub>2</sub>」なる単純な名詞句ではなく、発音されないコピュラで終わる従属節であると考えられる事を指摘する。

第5章では、第4章の考えに従うと連体節の属格主語であると解釈されるもののうち、[NP<sub>1</sub>属格形+[数詞+nofi]]は17世紀の共時態において他のいわゆる「同格の属格」とは異なるものであった可能性も考えられる事を述べる。

第6章は本稿全体の総括である。本研究のまとめと今後の展望を述べる。

## 0.3 略号

1: 一人称	PASS: 受動 <sup>6</sup>
2: 二人称	PERF: 完了
3: 三人称	PL: 複数
ABL: 奪格	PROL: 沿格
ACC: (定)対格	Q: (諾否)疑問
ADN: 連体形 <sup>4</sup>	SG: 単数
CAUS: 使役	
CONCL: 終止形	
COND: 条件	
CONV: 連用形	
COP: コピュラ	
DAT: 与格	
EXCL: 除外	
FN: 形式名詞	
IMP: 命令	
IMPF: 未完了	
INCL: 包括	
NEG: 否定	
NOM: 主格 <sup>5</sup>	
NP: 名詞句	
OPT: 希求	

<sup>4</sup> 満洲語は(現代日本語などと同様)連体形に終止用法がある。終止用法のものも、そうでないものも、共に連体形として記述する。

<sup>5</sup> 満洲語には音形のある主格標識は無い。また、本稿では記述に主格標識-Ø は用いない。斜格語幹を持つ人称代名詞の主格形にのみこのグロスを用いる。

<sup>6</sup> 満洲語において動詞の受動形を派生する形態素は使役形を派生する形態素と同じ形である。同じ形態素であるか否かという問題には本稿では立ち入らない。例文の提示の際は、便宜上、広義の受動文であると考えられるものはグロスで使役と区別して示す。

#### 0.4 本稿で用いる表記

満洲語ローマ字転写は、所謂 Möllendorff 式表記<sup>7</sup>を改変し、以下の場合に記号を挿入したものをを用いる。

##### ①格標識の-iの表記

字形に言及する場合を除き格標識-i/ni は-iで代表して表す。例文を示す際には字形通りに-iと ni を区別する。

以下のとおり満洲語の格標識は分かち書きされる場合と、されない場合がある。



図1 分かち書きされる場合(左)と、されない場合(右)

abka 「天」+属格標識-i『満文三国志』17卷41丁裏(左), 22卷47丁裏(右)



図2 独立形の i

人称代名詞三人称単数『満文三国志』6卷61丁表

分かち書きされた格標識の-i は独立形の i(図2参照, 自立語として用いられる)と字形が異なるから、「スペース+i」と表記して、自立語の i と区別した満洲文字の表記を反映させる。

<sup>7</sup>Möllendorff(1862)と多少字形が違っても事実上同じである転写方法が「Möllendorff 式」と呼ばれている。例えば現行の殆どの「Möllendorff 式」転写で Möllendorff(1862)の転写方法における左右逆のアポストロフィは通常のアポストロフィで代用されている(本稿も同様)。

語幹に続けて書かれる格標識-i には(特にグロスを付さない時に)一般的に満洲語学においてはハイフンを書かないが、本稿では i の語末形を用いて書かれたこの属格及び具格の格標識は常に前にハイフンをつけて-i と表記する。-i と表記しても、その前にスペースは入れない。図 1 の二つの例は左を abka -i, 右を abka-i と表記する。

例外として 2.2 節で-i の分かち書きの有無に関する問題を扱う時のみ、分かち書きされない-i を、ハイフン無しで語幹に続けて(図 1 の右であれば abka-i ではなく abkai と)書く場合がある。

## ②漢語の分かち書き

漢語の多音節語の発音を満洲文字で表記する際に分かち書きしたものは「・」で区切って表記する。このような漢語の分かち書きはされる場合とされない場合があり一定しないが本稿では資料の通りに転写する事とする。

図 3 の例では、一般的な転写では互いに区別されずに他の語と分離して i と書かれる字が中央に二つある、以下の例のとおり、本稿ではこれを「i i」とは書かずに、最初の独立形の i は漢語の固有名詞「司馬懿」の最後の音節であるから「・」で区切って syma「司馬」に続けて表記する。語幹から離して書かれた格標識-i は語幹からスペースを空けて-i と表記する。

例：	一般的な転写	syma	i	i	cooha
	本稿の転写	syma・i		-i	cooha
		司馬・懿		-i	兵
		「司馬懿の兵」			



図 3 syma・i -i cooha

『満文三國志』20 卷 67 丁表

## 第1章 導入

この章では満洲語が如何なる言語であるかを確認し、分析する格標識と資料について重要事項を説明する。

### 1.1 言語について

#### 1.1.1 満洲語の概要

満洲語の概要を簡単に述べる。

満洲語はアルタイ諸言語の1つで、ツングース語族(満洲・ツングース語族とも)に属する<sup>8</sup>。

音韻上の特徴をいくつか挙げる。日本語、朝鮮語と異なり r と l が音韻論的に対立する。l は語頭に立つが、r は語頭に立たない。ng(すなわち[ŋ])は音節頭に立たず、固有語では語末にも立たない。母音調和がある。母音の長短の音韻論的対立は恐らく無く、アクセント/トーンの音韻論的対立も恐らく無い。

文法上の特徴は日本語に似る。日本語同様に、基本語順は SOV 型であり、形態的類型では膠着語に分類され、主格対格型の格表示で、従属部表示型の言語である。動詞に人称や数が表示されない点、冠詞が無い点、文法上の性の区別が無い点も日本語と同じである。日本語ほど頻繁ではないが主語が省略される事がある。その一方で、日本語と異なり人称代名詞は閉じた類である。3 人称の人称代名詞は存在するが、ほぼ主文の主語または主題と同一指示になる場合に用いられるのであって、現場指示も不可能であるようだ。1 人称複数代名詞に(単純に聞き手を含むか否かの対立ではない)包括形と除外形がある。モンゴル語や北京語同様に使役と受け身の標識が同形である点も日本語と異なる。

語彙の特徴としては、日本語、朝鮮語に比べると用言による敬語表現が極端に乏しい点、モンゴル語からの借用語が多く、sain「良い」といった、基礎語彙にも及んでいる点、モンゴル語からの借用語ほど多くはないが、漢語からの借用語も少なくない点を挙げる事が出来る。

---

<sup>8</sup> 本稿では「アルタイ語族」を認める立場はとらない。基礎語彙の音韻対応が十分に確立されていない事が理由である。

満洲語は日本語に類似の特徴を比較的多く持つ言語として日本語系統論や類型論で注目される事が多い言語である。もっとも、かつて注目された SOV 語順という特徴は他のアルタイ諸言語にも一般的に見られる特徴であるばかりか、その後の類型論の進展により世界の言語で最も多く見られる基本語順である事が明らかになっている。それ以外の点で、日本語との類似点として注目される事がある現象として、古典日本語の係り結び(これも定義次第で日本語にしか無い現象になったり、世界中の言語にある現象になったりするが)に類似の現象がある。その一例を以下に示す。これは、当然である事を強調する副詞 *esi* のある文で動詞が条件連用形 *-ci* で終止するもので、その存在は 18 世紀の文献『清文啓蒙』<sup>9</sup> (1730 年序) 等で記述説明されており以前より知られている。

(1)	<i>deo</i>	<i>-i</i>	<i>jili</i>	<i>uttu</i>	<i>o-ci</i>
	弟	<i>-i</i>	怒り	この様	なる-COND
	<u><i>bi</i></u>		<u><i>esi</i></u>	<u><i>jobo-ci</i></u>	
	1.SG.NOM		当然	苦しむ-COND	

「弟の怒りが、この様であるならば、私はもちろん苦しい。」

(下線部語順通りの訳：「…私は当然(だ)、苦しんでも<sup>10</sup>。」)

原漢語：弟性如此。吾不放心。

三 11:036b<sup>11</sup>

17 世紀の満洲語話者は元々は漢語を話さなかったが、1644 年の清朝の北京占領とそれに続く北京への遷都以降、当時の北京語をも自由に話せる者が増加し、18 世紀には満洲

<sup>9</sup> 『清文啓蒙』第三卷 56 丁表

<sup>10</sup> *-ci* は条件 (conditional) のみならず譲歩 (concessive) としても用いられる。

<sup>11</sup> 『満文三国志』の 11 卷 36 丁裏。原漢語は、『三国志通俗演義』人民文学出版社 (1974) の影印によるものである。

語話者の衰退が顕著になった。現代満洲語の方言は中国の東北地区に、駐防八旗<sup>12</sup>の満洲語の方言の末裔と思われるものが（漢語の影響でかなりの変化を被った状態で）わずかに話者を残しているが、現代満洲語で社会生活を営める状況ではない。満洲語の方言と呼べる言語であるシベ語は新疆ウイグル自治区のシベ族<sup>13</sup>に多くの話者がおり、シベ語による出版も行われている。

### 1.1.2 17, 18世紀頃の状況

満洲文字による文献資料が残されていて、かつ清朝(およびその前身)の首都で満洲族(およびその前身となる集団)に満洲語の母語話者が存在していた時期は、だいたい17世紀から18世紀までである。18世紀には北京で満洲語の話者数は減少しており、第一言語としては満洲語が話されなくなっていった。ここではこの時期の満洲語の状況について概略を述べる事とする。表1に満洲語に関する略年表を示す。満洲語にとって重要な資料の成立した時期に日本で起きた出来事も参考のために左に附した。もちろん、この日本の出来事は満洲語が蒙った言語変化とは何の関係も無い。

<sup>12</sup> 八旗とは満洲人等が所属した社会的・軍事的組織である。「八旗の将兵は、順治元年(1644)の清朝の入関後、ほとんど全て北京およびその周辺に移住した。さらに清朝は中国全土を平定していくが、その過程で軍事的要衝に八旗の一部を割いて駐屯させた。これを駐防八旗といい、北京駐屯の八旗を禁旅八旗という。これら旗人には、入関後、俸禄・錢糧を支給することが規定された。旗地と俸禄・錢糧が、旗人の経済的基盤であった。」楠木(2009: 6)

<sup>13</sup> シベ族は清朝(後金)が明朝から独立する以前から、満洲族とは別の民族であった。故地も満洲族よりも北方で、歴史資料に実証されているだけでも16世紀末から17世紀末までの約100年間は満洲族の直接支配下ではなく、ホルチン=モンゴル族の直接支配下にあった。この時期シベ族がいかなる言語を話していたかは不明である。清代のシベ語については殆ど実態が不明ではあるが現代シベ語が18世紀に満洲語の強い影響を受けた言語である可能性が早田清冷(2013b)に述べられている。シベ族が瀋陽と北京に移住したのは18世紀の初めの事で、その後、辺境防衛の目的で1764年に瀋陽から新疆へ移住するために出発した人々の末裔が現在のシベ語話者である。シベ族の歴史に関しては楠木(2009)を参照されたい。現在のシベ語は、3人称の人称小辞 *ni* があり、主題標識(取り立て助詞)的に使用される点や、取り立て助詞 *li* 「～だけ」など、モンゴル語に強い影響を受けた言語である満洲語よりも、さらにモンゴル語に近い特徴を有している。

表 1 満洲語略年表

日本		清				
秀吉が日本統一 『キリンタン版 平家物語』	豊臣氏	明	ホンタイジ生まれる	1590	ヌルハチ	
関ヶ原の戦い			満洲文字創成	1600		
『日葡辞書』			1610			
大阪夏の陣	江戸幕府(徳川氏)		後金	1616	サルホで明の後金討伐軍を撃破	1620
				満洲文字改革	1630	
鎖国の完成			1636	ムクデンで順治帝生まれる	1640	
由井正雪の乱			1644	北京占領 ムクデンより遷都	1650	順治帝
			1650	『満文三国志』 北京で康熙帝生まれる	1660	
					1670	康熙帝
			1683	雍正帝生まれる 『大清全書』	1680	
				1690		
赤穂浪士討ち入り		1708	『満文金瓶梅』 『御製清文鑑』 乾隆帝生まれる	1710		
				1720		
	1730	『清文啓蒙』	1730	雍正帝		
			1740	乾隆帝		
徳川吉宗死去	1751	『清文彙書』	1750			
		満洲語話者の大幅な 減少が顕著に	1760			
『解体新書』	1771	『御製増訂清文鑑』	1770			
			1780			

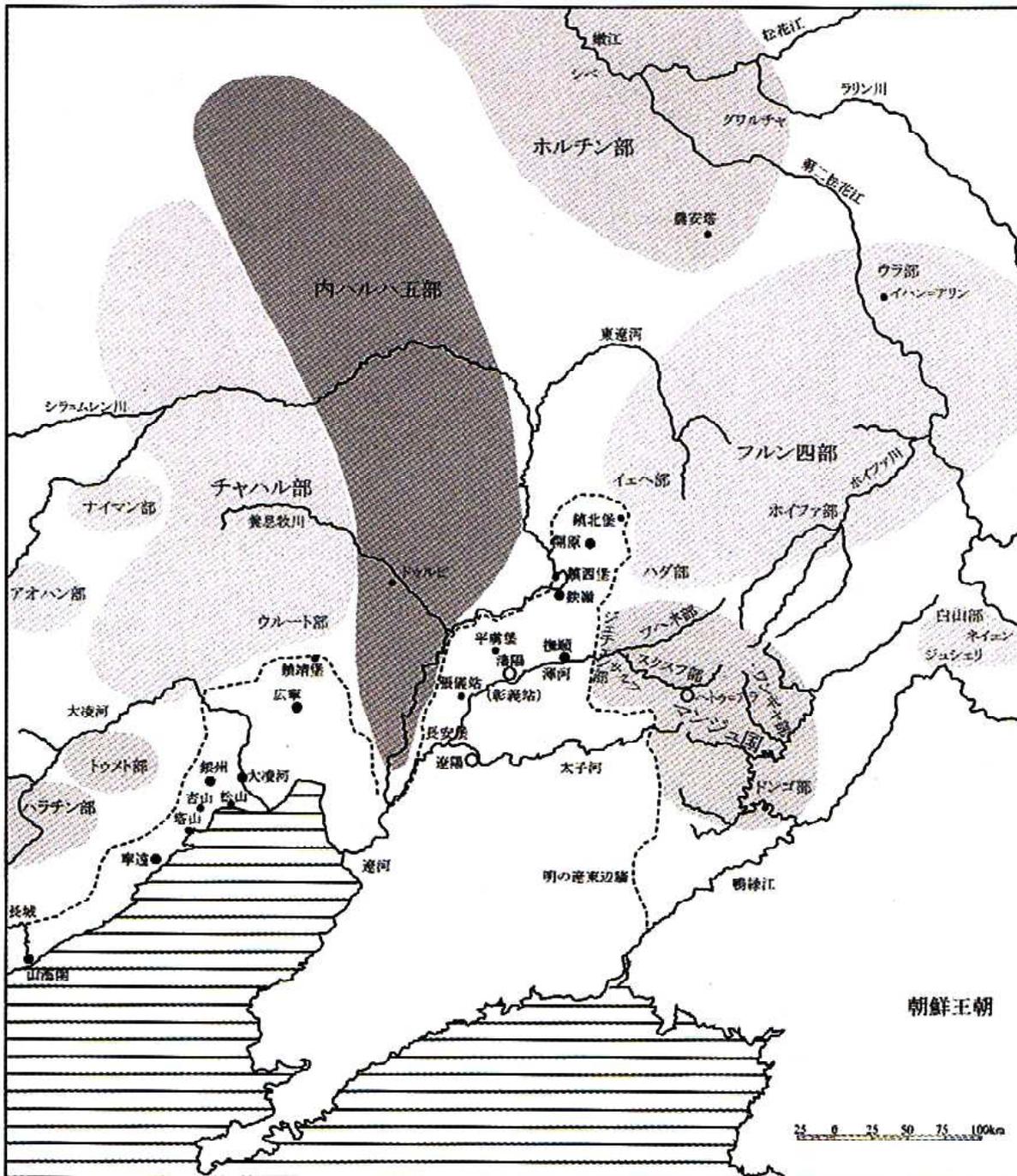


図4 16世紀末の状況

(画像出典：楠木 2009: 69 「16世紀末の女直諸部と東部内モンゴル諸部」)

シベ族は北のホルチン=モンゴルの支配を受けていて、この状態はさらに約百年続く事になる。ヌルハチの本拠地はヘトゥアラ(マンジュ国のほぼ中央)である。清朝の最初の首都、瀋陽(ムクデン、盛京)は、まだ明の支配下にある。

### 1.1.2.1 満洲文字創成

ヌルハチ達満洲族はもともと書き言葉としてはモンゴル文字<sup>14</sup>によるモンゴル文語を使用していたが、1599年（明朝の年号では万暦27年）にモンゴル文字<sup>15</sup>を用いて満洲語の表記を開始したとされている。

### 1.1.2.2 無圏点満洲文字時代

公式には1599年に満洲語を書き始めてから1632年の満洲文字改革までが無圏点満洲文字を用いた満洲語の表記が行われていた時代とされる。後述の文字改革の後の満洲文字が音素の区別をするためにモンゴル文字の（主に右側に）丸（圏）や点といった区別符を付した字母を有しているのに対して、この時代の満洲文字には、それが無い事から無圏点満洲文字と呼ばれ、文字改革以後の満洲文字（有圏点満洲文字）と区別される。

この無圏点満洲文字による表記は1599年から始まっていたとされるが、今日、残存し公開されていて、研究者が文献資料として利用できるものは17世紀初頭のものからである。清朝の政権の最初期の公文書『満文原檔』<sup>16</sup>の最初の記事は1607年の日付のものであり、用いられている文字表記の特徴からも比較的その日付に近い17世紀初頭の時期に書かれた可能性が高い。

---

<sup>14</sup> 正確に言うと、今日のモンゴル文字ではなくて、よりウイグル文字に近い「モンゴル文字」によるモンゴル文語であると考えられる。

<sup>15</sup> ほぼ、モンゴル文字をそのまま使用したものであるが、17世紀初頭に同じ書記によって書かれたと思われるモンゴル文語と満洲語の記事を比べると使用される字形にも若干の違いが見られる。

<sup>16</sup> 台北故宮博物院所蔵の1607年から1636年までの檔案を2005年に公刊したものである。内容は1969年に『旧満洲檔』の名で公刊されていたものであるが、写真、製本とも質が向上している。『満文原檔』を18世紀乾隆年間に重鈔した資料が日本では『満文老檔』の名で知られている。有圏点で書かれたものと無圏点で書かれたものがあるが、ただ『満文老檔』と言うと有圏点で書かれたものを指す事が多い。

<sup>17</sup> この記事は文の途中から始まっている。それ以前の日付の記事も書かれていた可能性が高い。

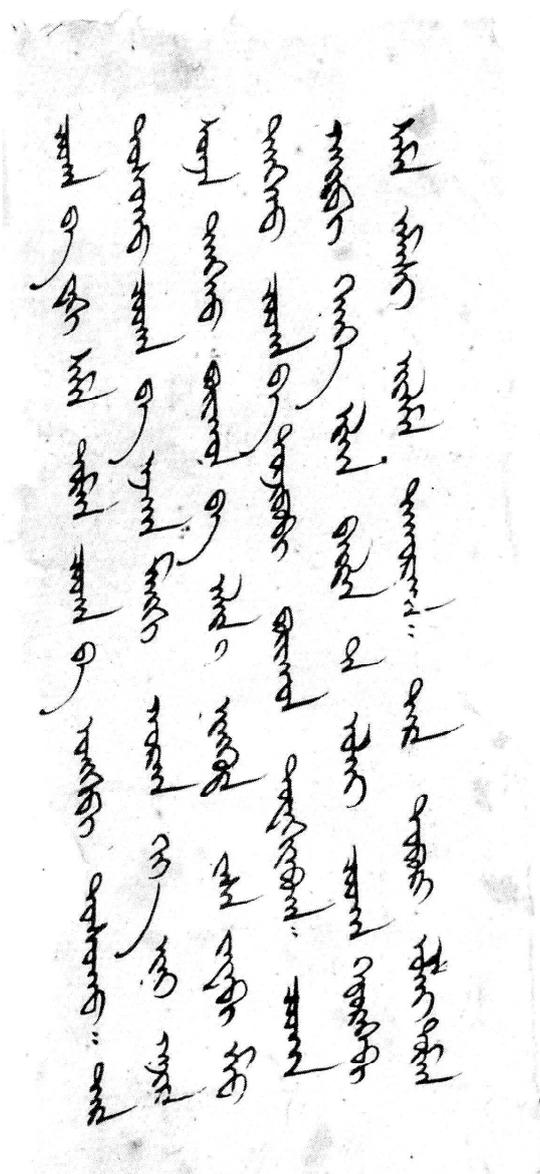


図5 『満文原檔』の最初の記事

文字の右側に圈点は無い。文字の左側に見える点は、もともとモンゴル文語でも用いられていたものである。(画像は馮明珠 主編 2005 第一冊 2 頁による)

### 1.1.2.3 満洲文字改革

無圏点満洲文字は、音素を十分に書き分けられないという欠点<sup>18</sup>を有していた。1632年に当時の皇帝ホンタイジは満洲文字の改良をダハイ・バクシに命じ、新たな表記法を導入した。これにより満洲文字の読みの曖昧性は相当程度解消された。建前としては、従来の無圏点満洲文字では固有名詞を正しく読むのが困難である、というのが理由であった。

この文字改革は公式には1632年とされるが、実際には『満文原檔』を見る限り1632年以前の記事でも圏点の付与が見られる。ただし、この圏点は、当時から稀に使用されていた補助記号なのか、後代に書き込まれたものなのか、あるいは後代に清書された文献が混入しているのか不明なものが多々ある。文字改革以降の『満文原檔』の記事も有圏点と無圏点の混淆である。

---

<sup>18</sup> これは当時および現在のモンゴル文字でそれぞれの時代のモンゴル語を表記する際にも存在する問題であるが、モンゴル語の場合は、諸方言の話し言葉とは乖離したモンゴル文語が長期にわたって用いられた。満洲語の場合、モンゴル帝国や、北元の支配下の様々なモンゴル系言語に比べると、恐らく方言差は大きくなく、不完全な表音文字を書き言葉に用いる事の利点は無かったと考えられる。

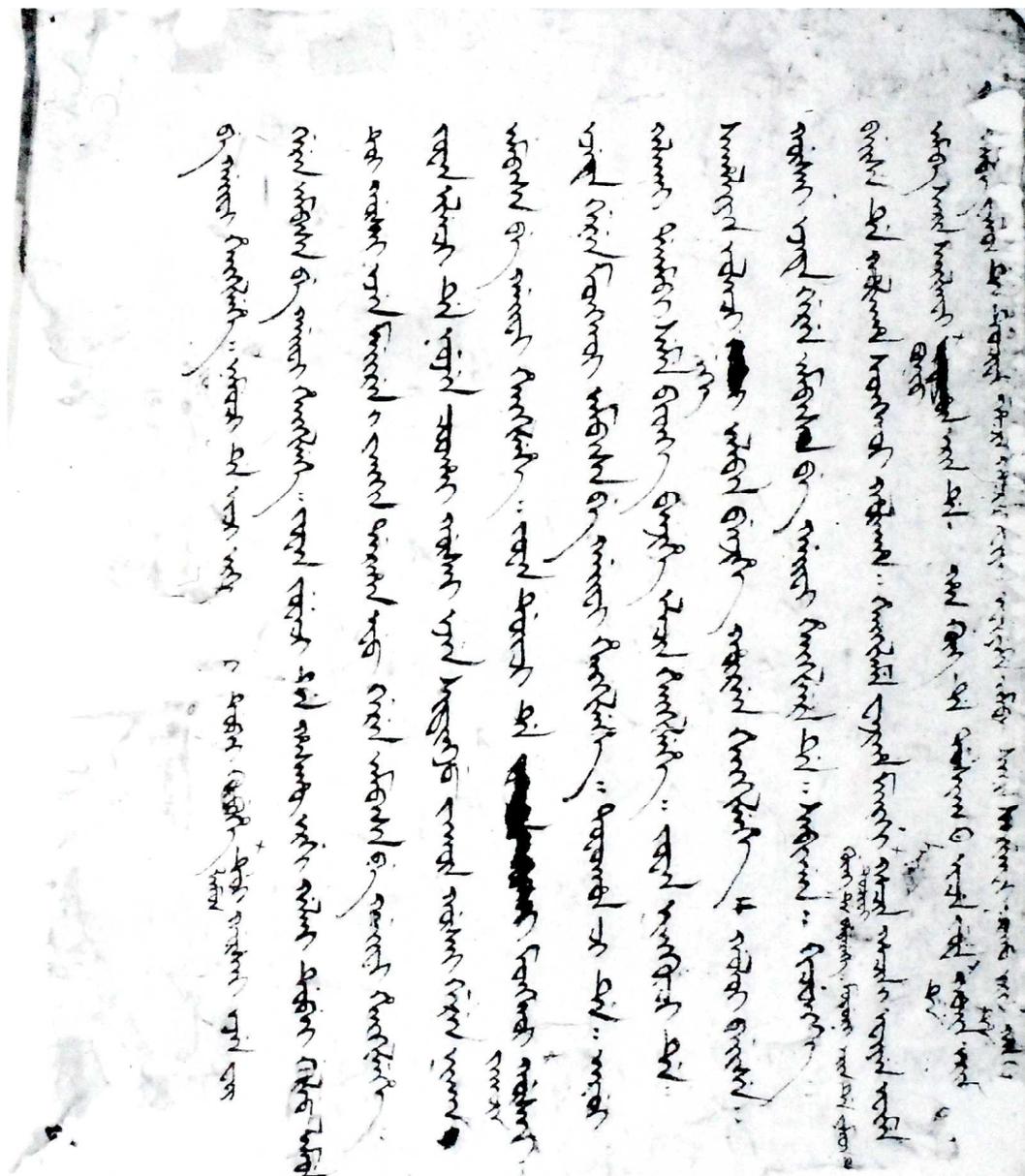


図6 『満文原檔』の有圈点満洲文字による記事(第十冊日字檔冒頭)

(画像は馮明珠 主編 2005 第十冊 1 頁による)

#### 1.1.2.4 順治年間(1644年 - 1661年)

順治帝は 1643 年に 6 歳で皇帝に即位した。清朝の皇帝としては清朝が北京を支配する以前に生を受けた最後の皇帝である。その翌年に明が滅亡して、清朝は、長城の東端に位置する要塞である山海関を越えて、北京を占領した(「入関」と呼ばれる)。この後、清朝が北京に遷都した事により、瀋陽(ムクデン)の満洲族は(以前より清に投降した漢人はいたが)圧倒的に漢語話者の多い地域に移り住む事になった。この時期に行われた満洲人の北京への大規模な移住は、当時、清に滞在していた日本人漂流民にも目撃されている。江戸初期に日本で書かれた資料である『韃靼漂流記』には、これを目撃した日本人の証言として、瀋陽(ムクデン)から北京に向かう道が移住する満洲人で埋め尽くされていた事が記されている(園田 1991[1939]: 29, 141 参照)。本稿で分析の中心に据える資料はこの時期に成立した『満文三国志』(1650 年序)である。

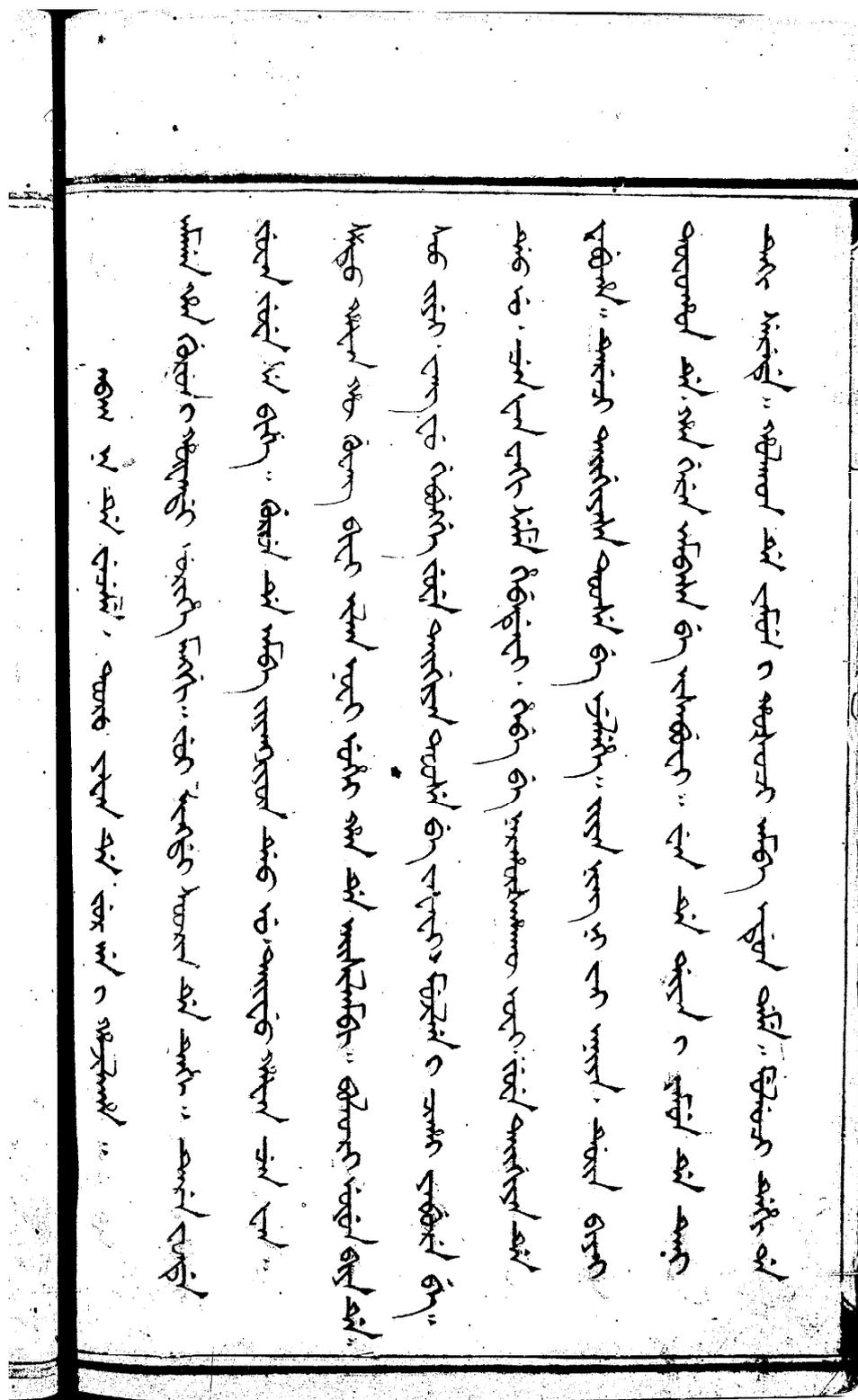


図7 『満文三国志』本編(物語)の冒頭部分

### 1.1.2.5 康熙年間(1662年 - 1722年)

康熙帝は、清朝の皇帝としては初めて、北京で言語形成期を過ごした人物である。この康熙年間になるとようやく満洲語の辞書が公刊されるようになる。満漢辞典である『大清全書』(1683年序)は漢人の編纂による民間の辞典であるが最初の満洲語辞典として重要な資料である。18世紀になると満々辞典である『御製清文鑑』(1708年序)が皇帝の命令で編纂されている。

本稿でも必要に応じて資料として用いる『満文金瓶梅』(1708年序)も同じ時期に出版された。順治年間の『満文三国志』は、本文から版心(柱)に書かれている本の題名と丁数に至るまで全て満洲語で書かれていたが、『満文金瓶梅』では、漢語の固有名詞や借用語を中心に所々にフリガナのように漢字が振られ、柱は本の題名こそ満洲語だが回の数と丁数は漢語で書かれている。

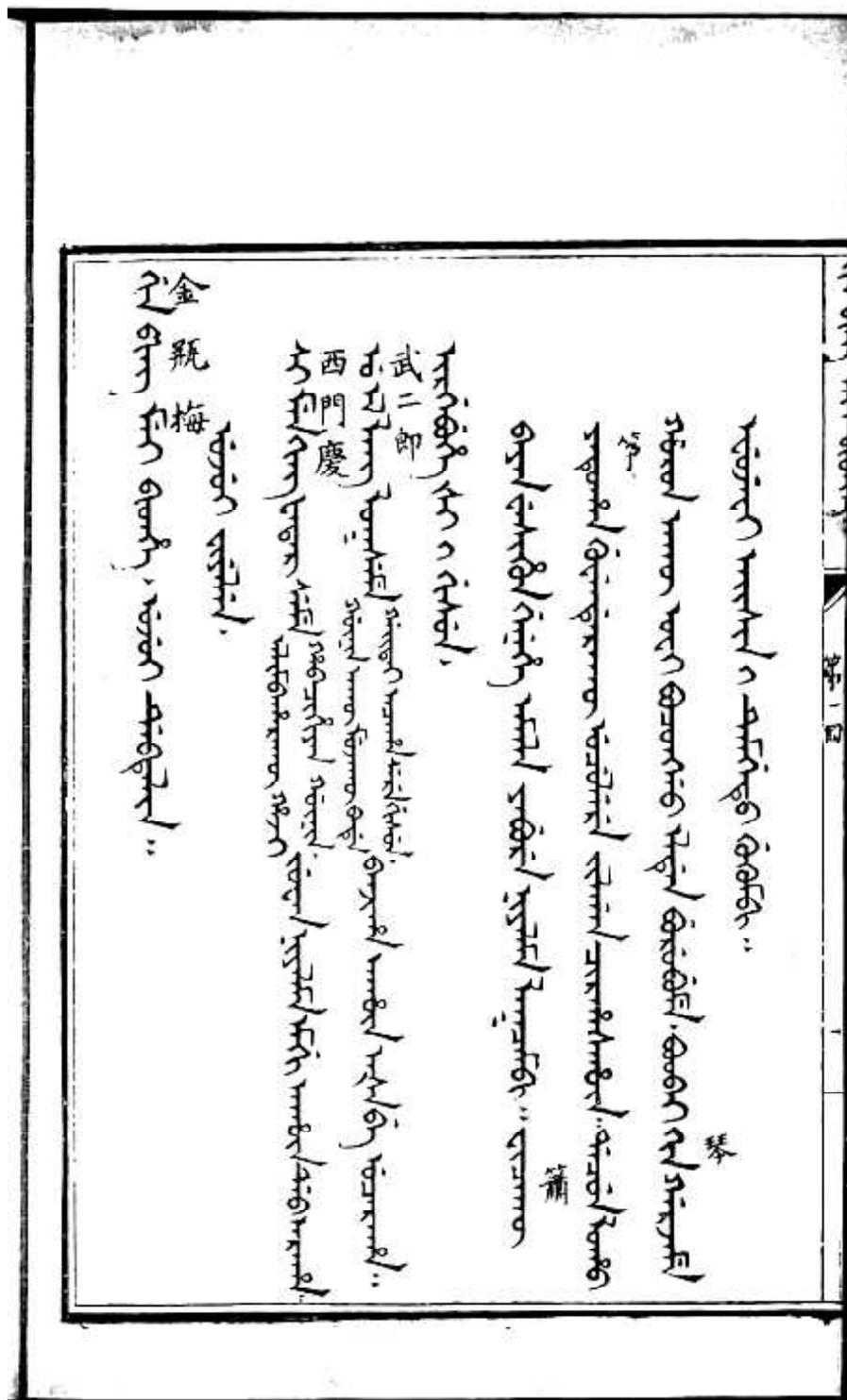


図8 『満文金瓶梅』本編(物語)の冒頭部分

## 1.1.2.6 その後

18世紀には、満洲語を第一言語とする満洲人の人口が北京で減少し、失われていったと考えられている。正確な衰退の状況は不明であるが、順治年間に満文だけで出版された『満文三国志』を写し、漢文を併記した形に直した満漢合璧本<sup>19</sup>が雍正年間(1723～1735)<sup>20</sup>に出版された事も満洲語の衰退の表れであろうと考えられる。この本は本文こそ満漢併記であるものの図9にも見られるように版心は漢文一色である。版心の題名は漢文のみで「三国志」とあり、下に「巻一」、丁数「二」とある。同時期に『清文啓蒙』の様な満洲語教科書の出版も行われている。

乾隆帝の時期には、皇帝の意向によると思われる同音異義語の綴りの改変が行われている。「白」と「煙」は共に *šanggiyan* と書かれていたのが、「白」のみが *šanyan* に変更され、「角(つの)」と「齒」は共に *weihe* と書かれていたのが、「角」のみが *uihe* に変更された。これらの新しい綴りは、皇帝の命令で編纂された満々漢辞典である『御製増訂清文鑑』(1771年序)等で採用されるに至っている。

<sup>19</sup> 同内容の漢語と満洲語が併記される(わかりにくい語句だけに漢語が附されるのではなく全文が対訳になっている)体裁を満漢合璧と呼ぶ。

<sup>20</sup> 序文が無く、正確な出版年は不明である。康熙帝の名「玄燁」の「玄」と、雍正帝の名「胤禛」の「胤」が避諱されているが、次の皇帝である乾隆帝の名「弘曆」の「弘」が避諱されていない事が岸田(1997: 49)に述べられている。

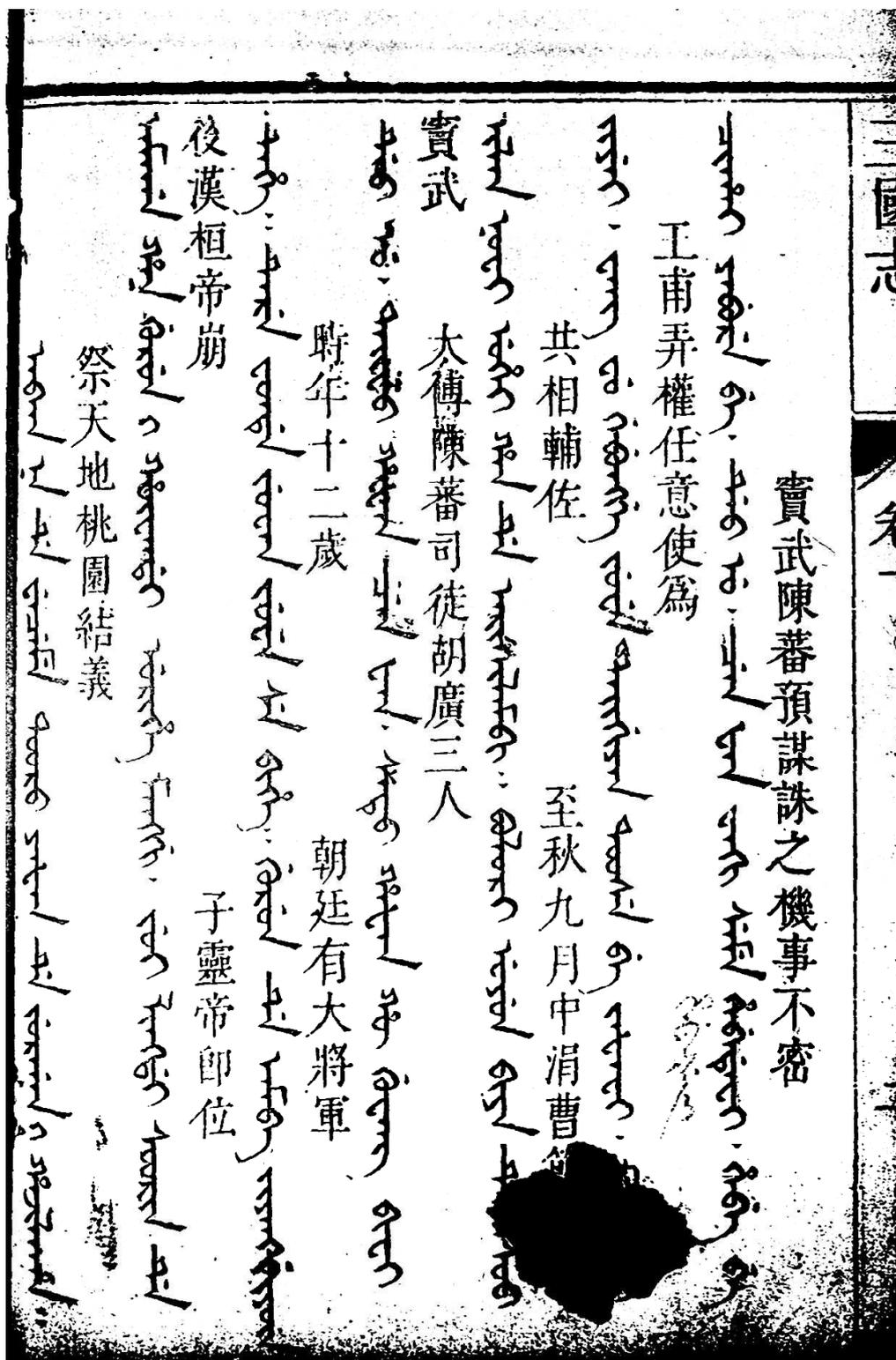


図9 『満文三国志』を写した満漢合璧本、本編(物語)の冒頭部分

## 1.2 本稿で用いる資料

従来の満洲語研究では文献資料の成立時期の差を無視して、記述が行われる事が多々あったがこのようなものは好ましくない。この言語は 17～18 世紀の間であっても時代差が見られる。格標識が関わる文法形態素として、理由を表す *dahame* 「～なので」が 17 世紀の内に「(前に格標識の無い) *dahame*」という形から「*be*(対格標識)+*dahame*」に変わった事が早田輝洋(2009)で指摘されている。また、基礎語彙に含まれる語にも意味の変化が認められる。「黒」を表す色彩語が *sahaliyan* から *yacin* へ交替するという通時的変化が 18 世紀の初めまでに始まっていた事が早田清冷(2013b)で指摘されている。

本稿では、順治 7(1650)年序、24 巻本の満洲語訳『三国志演義』(*ilan gurun -i bithe*, 刊本, 以下『満文三国志』)を資料とする。コーパスの規模は約 50 万語<sup>21</sup>で、満洲語で書かれた単一の言語作品としては最大の規模のものである。原則として『満文三国志』を一共時態とみなすが、必要に応じて他の時期の資料も補助的に参照する。特に『満文三国志』と同程度のコーパス規模の資料であり、(四書五経や仏典と異なり比較的満洲語が自然であると思われる)翻訳小説である資料として、康熙 47(1708 年)序の満洲語訳『金瓶梅』(*gin ping mei bithe*, 刊本, 以下『満文金瓶梅』)を必要に応じて参照する事とする。

満洲語は漢語の強い影響を受け、ついには話者を失った言語である。特に属格に関しては、以下(2)の b)に見られる様な属格標識-*i* の不使用について、これが漢語の影響である可能性が津曲(1992: 264, 277)で述べられている。この属格標識-*i* を用いない *muke ihan* 「水牛」という語は、津曲(1992: 264)にもあるとおり、漢語からの翻訳借用であると考えられる<sup>22</sup>。

<sup>21</sup> 言語学上の語の認定とは異なる。基本的に、スペースで分かち書きされた単位の数である。分かち書きされた格標識は 1 語と数えるが、格標識や単語が前の語に続けて書かれた場合は前の語と併せて 1 語とする。ただし、漢語の多音節語が複数に分かち書きされている場合は例外として、全ての分けて書かれた音節を併せて 1 語と数える。

<sup>22</sup> 水牛は(有史以前は現在よりも北の地域まで生息していたようであるが)、清朝が明朝に替わって中国を支配する以前に満洲族が支配していた地域では見られない動物である。

- (2) a) muke -i ihan  
 水 -i 牛  
 「水牛」 『御製清文鑑』<sup>23</sup>(1708年序)
- b) muke ihan  
 水 牛  
 「水牛」  
 原漢語: 水牛 金 01:35a<sup>24</sup>(1708年序)

特に、格標識-iの分析に関しては、漢語の影響が少ない時期(北京遷都以前)に言語形成期を過ぎた世代の満洲語の分析が優先されるべきである。

### 1.2.1 『満文三国志』と『満文金瓶梅』について

『満文三国志』が成立したのは1650年で入関からおよそ6年後である。この時期は清が北京を支配し、満洲語話者が北京に移住して間もない時期なので、北京で言語形成期を過ぎた満洲語話者が翻訳に参加する事は不可能である。本資料に反映されている満洲語は、清朝の勢力が万里の長城以南の漢語圏に及ばなかった時期に言語形成期を過ぎた話者によるものだと考えられる。後述の『満文金瓶梅』と異なり、漢語の固有名詞であっても満洲文字の隣に漢字が振られる事はない。すべて満文一色である。

『三国志演義』の清代の満洲語訳本として現在我々が分析できるものには、順治年間の翻訳である『満文三国志』の他にも、この順治本を(あまり正確ではなく)写し、翻訳底本とは異なる漢文を併記した雍正年間の満漢合璧本がある。岸田(1997:38)によると、本稿で用いる順治の『三国志演義』の翻訳底本として考えられるのは流布本ではなく「嘉靖

<sup>23</sup> 乾隆期の『御製増訂清文鑑』(1771年序)は、ほぼこの辞典に若干の見出し語を増やして、漢語訳を追加し例文を削除しただけのものである(他の「清文鑑」と名のつく清代の辞典も基本的にこの辞典に他の言語による記事を追加したものである)から、この『御製清文鑑』が事実上唯一の満々辞典である。康熙帝の命令により編纂された。

<sup>24</sup> 『満文金瓶梅』の第一卷三十五丁表。原漢語は北京大学図書館蔵善本叢書『新刻繡像批評金瓶梅』北京大学出版社1998年の影印による。

本に類似のテキスト」であるという<sup>25</sup>。

『満文金瓶梅』は、1708年(康熙47年)序の資料である。この時期の、少なくとも北京の知識層の満洲語母語話者は、満洲語と漢語との二言語併用話者であったと考えられる。表音文字である満洲文字は、当時の母語話者であれば容易に習得出来たのに対して、漢文は識字が困難であったから、明代の白話小説を満洲語に訳して満漢合璧でない形式で出版する需要は存在していたようである。基本的に満文文献なのだが、先にも述べたとおり漢語の固有名詞や借用語を中心に所々にフリガナのように漢字が振られ、漢語の能力も或る程度はある満洲語話者を読者として想定している事が窺える。

この『満文金瓶梅』の翻訳以外に『金瓶梅』の満洲語訳の存在は知られていない。早田輝洋(1998: 4-5)によると『満文金瓶梅』の翻訳底本は詞話本とも張竹坡本とも考えられず、「崇禎本系統」のテキストであると考えられるという。

### 1.2.2 『満文三国志』の同時代性の限界

『満文三国志』を原則として一貫時態とみなすが、本資料の前半と後半<sup>26</sup>では用いられる語彙の傾向が異なっており同時代性に若干の限界がある事もここで報告しておく。

本資料に於いて *heb(e)de*-「相談する」はほぼ前半部分にしか見られず、*medege/medehe*「情報」、東を表す *šun dekdere (ergi)*「太陽の昇る(方向)」、西を表す *šun tuhere (ergi)*「太陽の沈む(方向)」は前半部分にしか見られない。

さきの語と同じ意味で用いられている *heb(e)še*-「相談する」、*mejige*「情報」、*dergi*「東(文字通りには、かみ手)」、*wargi*「西(文字通りには、しも手)」は前半、後半を通して用いられている。

<sup>25</sup> 嘉靖本と『満文三国志』の差異については早田輝洋(2008)も参照されたい。全く同じというわけではない。

<sup>26</sup> 何をもって前半と後半を分けるかは簡単な問題ではないが、本稿3章では14巻と15巻の間に区切りを設けて分析を行う。

表2 「相談する」 heb(e)de-と heb(e)še-の分布

巻	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	合計
heb(e)de-	11	15	12	15	16	3	10	3	17	2	1	3							1						109
heb(e)še-	29	8	21	9	6	13	22	22	5	4	29	27	39	36	29	19	12	10	26	19	15	25	18	18	461

表3 「情報」 medege/medehe と mejige の分布

巻	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	合計
medege/medehe	4	2			7							1													14
mejige	7	4	5	12	9	20	16	10	11	17	5	7	12	6	11	9	13	12	19	19	14	15	9	9	271

表4 「東」を表す語と「西」を表す語の分布

巻	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	合計
šun dekdere (ergi)	1				3	2						1													7
dergi	14	20	32	21	5	19	13	40	57	47	24	24	16	12	29	27	41	18	12	36	22	16	16	11	572
šun tuhere (ergi)		1	1		3																				5
wargi	8	7	13	16		5	14	18	6	10	4	17	17	8	9	7	5	18	20	18	14	6	13	14	267

この偏った分布の原因は、前半の翻訳を担当した人物と後半の翻訳を担当した人物の書き手の個性の違いである可能性があるが、時代差である可能性もある。

本稿は共時的研究に興味の中心を置くが、分析対象を一満洲語話者の作品に限定できない以上、すべての形式の異同を徹底して共時的な対立に求める事はできない。むしろ通時論と共時論の混同を避けるための、共時的な視点とはっきり区別した通時的な視点の使用も必要である。

### 1.3 本研究に関わる文法上の重要事項

本稿の議論に関係する範囲で満洲語の文法上の重要事項を述べる。

#### 1.3.1 満洲語の格

音形のある格標識で連体修飾に用いられるのは属格標識だけである。「格標識なし」に関しては音形の無い主格標識-Ø を認める立場も考えられるが、本稿では主格標識-Ø を用いた記述は行わない。満洲語の格標識として一般的に認められるものは以下の通りである。

表 5 満洲語の格標識

	格標識	主な用法
格標識なし		主語, 述語, 目的語など
属格	-i/ni	主要部と同一ではない連体修飾要素, 主要部と同一のモノ(同格の属格), 従属節の主語(属格主語)
具格	-i/ni	道具, 手段, 動作の様態
対格	be	直接目的語, 被使役者, 従属節の主語(対格主語)
与格	de	時間, 空間, 間接目的語, 被使役者, 受身文の動作主
奪格	ci	起点
沿格	deri	経路

本稿で分析対象に据えるのは属格および具格の-i/ni である。特に一見して多機能に見える属格標識に興味の中心があるが、属格と同じ形をしている具格の標識-i/ni も議論に関わる場合がある。格標識なしの形も本稿の議論に重要に関わる。

以降、まず最初に 1.3.1.1 節で属格と具格の-i について例を挙げて説明する。次に 1.3.1.2 節で格標識無しの形を、1.3.1.4 ~ 1.3.1.6 節で残りの 4 つの格標識 be, de, ci, deri (これらはすべて連体修飾には使用されない。これらの格標識にさらに格標識-i を付加して連体修飾を行う事も出来ない。)について説明する。

##### 1.3.1.1 属格標識と具格標識

ツングース語族の多くの言語が属格を持たないのに対して、満洲語には属格が存在する事



従って、もともと母音 i で終わっている語の格標識無しの形は、属格の用例としても、属格でない用例としても、採用する事が多くの場合<sup>31</sup> 不可能である。

また、格標識-i は ni と表記される事がある。最初期の満洲語の資料ではほぼ全て-i と書かれていたのだが時代が下ると次第に ng の後では ni と表記されるようになった。

(5) pangtung ni erdemu

龐統 -i 才

「龐統の才」

原漢語: 龐統之才

三 12:035b

この ni という表記の問題は 2.1 節で詳しく扱う。

格標識-i には大きく分けて「同格」用法のもの以外に、少なくとも①連体用法、②連用用法(具格標識)、③主語用法、の3つの用法がある。日本語の「赤いのを取る」の「の」の様な、主要部のスロットに来る形式名詞的な用法は無い。すなわち、動詞連体形、形容詞、名詞属格形の修飾を受ける体言としての機能は無い。また、日本語は「僕のを取る」の「僕の」のように、連体用法の形と同じ形「NP+の」が「NP と関係を有するモノ」の意で名詞的に用いられるが、満洲語の格標識-i にはそのような用法は無い。

---

<sup>31</sup>[指揮官の名前+ cooha「兵」]という名詞句で、第一名詞句である指揮官の名前が-i で終わらない名詞である場合は必ず属格標識-i を伴うから、(4)の例は属格の例として採用できる。また、以下の例の様に、後置詞 baru の前の名詞が元々母音-i で終わっている場合もこの jui が属格である可能性が高いと判断できる。この後置詞 baru 「対して」の前では i 以外の音で終わる名詞は通常は格標識-i を伴うからである。

juwe jui baru

二 子 対して

「二人の子に対して」

原漢語: 與二子

三 21:051a

『満文三国志』中で ts'oots'oo -i baru 「曹操に対して」は 32 例なのに対して-i の無い ts'oots'oo baru は僅か 1 例である。



連用修飾であれば時間や空間には与格標識 *de* が用いられるが、*de* は体言を修飾できないから時間や空間でも連体修飾の際には属格が用いられる。

(10) emu erin -i baturu jui

一 時 -i 勇敢な 子

「一時の勇敢な小僧」

原漢語: 一時之雄兒

三 24:053a

(11) tai·jeo hecen -i lio·hūi

代・州 城 -i 劉・恢

「代州城の劉恢」

原漢語: 代州劉恢

三 10:059b

以下は「行為名詞句 NP<sub>2</sub> と項 NP<sub>1</sub>」(西山 2003: 40)と説明できる関係である。(12)では行為名詞句 NP<sub>2</sub> の動作主体が NP<sub>1</sub> である。そして、(13)では行為名詞句 NP<sub>2</sub> の行為の対象が NP<sub>1</sub> である。

(12) sin-i yabun

2.SG-i 行い

「汝の行い」

原漢語: 汝所行

三 21:098a

(13) wesihun fusihūn -i ilgabun

尊 卑 -i 区別

「尊卑の区別」

原漢語: 尊卑之殊。

三 04:094a

そして次のような例もある。*-i* は主要部と何らかの関係を有するものに幅広く使用できる。

(14) wehe -i sejen

石 -i 車

「石の車(石を発射して敵を攻撃する車)」

原漢語: 發石車

三 06:074b

(15) muke-i cooha

水-i 軍

「水の軍(水軍)」

原漢語: 水軍

三 02:037b

次は(14)同様に主要部が sejen「車」である例だが、第一名詞句の sele「鉄」は主要部の材料である。

(16) sele-i sejen

鉄-i 車

「鉄の車(鉄を材料とする車)」

原漢語: 鐵車

三 19:059a

このような主要部の材料になっている名詞句に用いる属格も風間(2013a)では類型論的に珍しい<sup>32</sup>という結果が出ているので、さらに複数の例を挙げておく。

(17) aisin menggun -i hoošan -i jiha  
 金 銀 -i 紙 -i お金

<sup>32</sup> このような NP<sub>1</sub> 属格形 + NP<sub>2</sub> において NP<sub>1</sub> が主要部 NP<sub>2</sub> の材料である用法は、モンゴル語ハルハ方言には見られないが、モンゴル語ホルチン方言については、「紙(という材料)の飛行機」を言うのに属格の表現が使える(風間 2013b: 257)という報告がある。ホルチン=モンゴル族はモンゴル民族の中では最も早い時期に清朝の支配下に入った人々である。一部のモンゴル系言語の属格形の用法は満洲語の影響を受けている可能性がある。

「金(色)と銀(色)の紙のお金」

原漢語: 金紙銀錢

三 01:033a

金紙銀錢というのは金紙と銀紙で儀式においてお金の代わりとするものである。この(17)の例では2番目の-iが問題の材料の用法である。他にもあらゆる材料で一般的に属格が使用される。以下は共に漢語からの借用語である gu「玉」と g'ang「鋼」の例である。

(18) gu -i doron

玉 -i 判子

「玉の判子(玉爾)」

原漢語: 玉爾

三 02:001a

(19) g'ang ni suhe

鋼 -i 斧

「鋼の斧」

原漢語: 鋼斧

三 15:037b

## ②連用用法(具格標識)

手段, 動作の様態などを表す。

(20)	loho	-i	saci-ci. <sup>33</sup>	gida	-i
	刀	-i	斬る-COND	槍	-i
	toko-ci		inu	da-rakū.	
	刺す-COND		もまた	関与する <sup>34</sup> -IMPF.NEG	

<sup>33</sup> 満洲語のパンクチュエーションは頻繁に用いられるものが二種類ある。小さな切れ目を一つの点(カンマで転写)で, 大きな切れ目を二つの点(ピリオドで転写)で表す。文末でなくても二つの点で区切られる事もあり, 必ずしも英語のカンマおよびピリオドとは対応しない。文献によっては二つの点よりもさらに大きな切れ目を四つの点で表す場合がある。

<sup>34</sup> da-は, 「関係する, 関心を払う, 影響を与える」等, 様々に用いられる動詞である。

「刀で斬っても、槍で突いても刃が通らない」

原漢語: 刀砍鎗刺亦不能入。

三 18:081b

- (21) cuwan baksan -i faida-fi  
船 隊 -i 並ぶ-PERF.CONV

「船は隊をなして並び…」

原漢語: 戰船, 各分隊伍。

三 13:015a

- (22) ere-ci tulgiyen liobei bi yargiyan -i sa-rkū.  
これ-ABL 以外 劉備 1.SG.NOM 本当 -i 知る-IMPF.NEG

「これ以外は、わたくし劉備は、本当に知りません。」

原漢語: 捨此之外。備實不知。

三 05:007a

### ③主語用法(属格主語)

従属節のうち、動詞連体形で終わる連体節または形容詞で終わる連体節の主語は-i で表す事がある。(23)が動詞連体形で終わる連体節の例で、(24)が形容詞で終わる連体節の例である。属格主語の(すくなくとも)一部は格標識無しの形——すなわち(23)の li·žu「李儒」——と交替可能であるように見える。

- (23) li·žu ebše-me dosina-ra-ngge  
李·儒 慌てる-IMPF.CONV 入っていく-IMPF.ADN-FN  
dungdzo -i tuci-re-ngge juwe nofi  
董卓 -i 出る-IMPF.ADN-FN 二 人  
karca-fi dungdzo na de tuhe-ke.  
ぶつかる-PERF.CONV 董卓 地 DAT 倒れる-PERF.ADN

「李儒が慌てて入っていくのと、董卓の出て来るの(の),

二人が激突して董卓が倒れた。」

原漢語: 儒急奔入。正撞董卓倒於地上。

三 02:058a

- (24) ts'oots'oo -i cooha -i komso be sabu-fí,  
 曹操 -i 兵 -i 少ない ACC 見える -PERF.CONV  
 「曹操の兵が少ないのを見て…」  
 原漢語: 視之。見操兵少。 三 04:047b

次の、(25)、(26)は、従属節内に直接目的語がある例である。(25)は属格主語の前に対格目的語が出ている例で、(26)は主語の後に対格目的語が出ている例である。

- (25) jang·fei be fan·ciyang, jangda -i  
 張・飛 ACC 範・疆 張達 -i  
 wa-ha be donji-fi.  
 殺す -PERF.ADN ACC 聞く -PERF.CONV  
 「張飛を、範疆と張達が殺したのを聞いて…」  
 (対応する原漢語なし) 三 17:009b

- (26) dung·dzo -i han be gidaša-ha-ngge  
 董・卓 -i 帝 ACC 欺く -PERF.ADN-FN  
 gemu li·žū kai.  
 皆 李・儒 だぞ  
 「董卓が帝を欺いたのも皆、李儒が(欺いたの)だぞ。」<sup>35</sup>  
 原漢語: 今董卓欺君者、皆李儒也。 三 02:068b

日本語では、このように従属節の動詞が他動詞である場合、従属節の主語の格標識に「が」の代わりに「の」を用いると許容度が低くなる<sup>36</sup>。しかし、満洲語では従属節の動詞が他動詞であっても格標識無しの主語に替わって属格主語が使用可能である。

<sup>35</sup> 「張本人は李儒だ」と述べる文脈である。

<sup>36</sup> 日本語の他動詞節では「が」に替わって「の」を使う事が出来ない事は Watanabe (1996) 等で日本語の統語上の制約とされている。満洲語の連体節の主語における主格(格標識無し)と属格の交替には、そのような他動詞による制約は無い事になる。



原漢語: 玄德。吾弟也。

三 04:014b

普通名詞の場合は(多くは不定の)目的語としての用法もある。

目的語

(30) niyalma                    wa-ha                    weile

人間                                殺す-PERF.ADN    罪

「人を殺した罪」

原漢語: 殺人之罪

三 07:006b

格標識無しの名詞が形容詞的に名詞を修飾しているように見える用法(31)もあるが全体としては少ない。17世紀半ばにおいては、先ほどの1.3.1.1節で見たような属格形の使用が一般的である。

(31) cf. (16)            sele                    futa

鉄                                ロープ

「鉄のロープ(鎖)」

原漢語: 鎖

三 05:042a

### 1.3.1.3 対格

直接目的語, 従属節の主語(対格主語)に用いられる。

以下は直接目的語の例である。

(32)    lioi·bu    **be**                    wa                    se

呂·布    ACC            殺す.IMP                    言う.IMP

「呂布を殺せ。」と言え。」

原漢語: 教殺呂布。

三 03:083b

対格は属格と異なり連体修飾には用いられない。また, 対格標識 **be** に続けて属格標識を

be-i の様に用いることも不可能である。

以下は被使役者の例である。

- (33) buce-he                    jug'oliyang                    weihun  
 死ぬ-PERF.ADN    諸葛亮                    生きた  
 sy·ma·i **be**                    burla-bu-ha.  
 司・馬・懿 ACC    逃げる-CAUS-PERF.ADN  
 「死んだ諸葛亮が生きている司馬懿を逃走させた。」  
 原漢語: 死諸葛走生仲達

三 21:001b

以下は従属節の主語の例である。属格主語に比べて例はあまり多くない様である。詳細な分析は未だ行われていない。

- (34) mim-be                    buce-he                    manggi.  
 1.SG-ACC                    死ぬ-PERF.ADN    後  
 mergen deo                    si                    jing·jeo -i  
 賢い    弟                    2.SG.NOM                    荆・州    -i  
 weile    be                    ali-ci                    o-mpi.  
 事                    ACC    受け取る-COND    成る-IMP.F.CONCL  
 「私**が**死んだ後，賢弟，お前が荆州を受け取れば良い。」  
 原漢語: 吾死之後，賢弟可攝荆州。

三 08:084a

#### 1.3.1.4 与格

時間，空間，間接目的語，被使役者，受身文の動作主に用いられる。

以下は時間(35)と空間(36)の例である。

- (35) bi                    emu                    erin                    **de**  
 1.SG.NOM                    一                    時                    DAT  
 cala-ha                    kai.  
 失敗する-PERF.ADN                    だぞ

「私は一時にて失敗したぞ(私の一時の失敗だ)」

原漢語: 吾一時之失也。

三 12:036a

- (36)    jiyang·wei            ceng·du   hecen    **de**        isinji-fi.  
          姜·維                成·都    城            DAT        到着する-PERF.CONV

「姜維は成都の城に到着して…」

原漢語: 姜維至成都。

三 23:056b

与格は属格と異なり連体修飾には用いられない。また、与格標識 **de** に続けて属格標識を **de-i** の様に用いることも不可能である。

以下は間接目的語の例である。

- (37)    te            sun·cuwan            in-i        non        be  
          今            孫·權                3.SG-i    妹        ACC  
          liobei    **de**        bu-fi,  
          劉備        DAT        与え-PERF.CONV

「今孫權は彼の妹を劉備に与え…」

原漢語: 今孫權以妹嫁之。

三 12:011b

以下は受身文の動作主の例である。

- (38)    lioi·kuwang,            joo·yūn   **de**        wa-bu-ha.  
          呂·曠                趙·雲    DAT        殺す-PASS-PERF.ADN

「呂曠は趙雲に殺された。」

原漢語: 呂曠被趙雲殺之。

三 07:096b

### 1.3.1.5 奪格

起点に用いられる。



二点である。

- ① 属性を表す体言(形容詞)を述語とする文は(モノを表す体言(名詞)を述語とする文と異なり)否定要素に **waka** 「～ではない」が用いられない事
- ② 人称代名詞が連体修飾を受けられない事が原因で、「形容詞+人称代名詞」なる名詞句は不可能だが、名詞句が併置される事(狭義の同格)は可能なので「名詞(句)+人称代名詞」という名詞句は可能である事

それぞれの例は以下の通りである。

#### ①形容詞述語文と名詞述語文の否定

形容詞述語文を否定すると否定要素として **akū** が用いられる。

- (41)      **wa-ci**                      **sain**              **akū.**  
             殺す-COND              良い              NEG  
             「殺すと良くない」  
             原漢語: 殺之不祥。

三 02:093a

コピュラ文の否定, すなわち名詞述語を「～ではない」と否定すると次のように否定要素として **waka** が用いられる<sup>37</sup>。

- (42)      **tere**              **diyocan**                      **waka**              **o-ci**                      **we.**  
             あれ              貂蟬(人名)              NEG              なる-COND              誰  
             「あれが貂蟬でないならば, 誰だ？」  
             原漢語: 非蟬何。

三 02:052a

<sup>37</sup> 名詞+ **waka** 「ではない」で **waka** の代わりに **akū** を用いると「亡い, 無い」といった存在の否定となりコピュラの否定ではなくなる。



- (45) sakda niyalma bi  
 老いた 人間 1.SG.NOM  
 「老人の私(直訳: 老人, 私)」  
 原漢語: 老夫

三 03:018b

このように、形容詞 sakda 「老いた」は人称代名詞の前に出現して人称代名詞の特徴を述べる事が出来ないが、名詞句 sakda niyalma 「老いた人間」は(45)のように、人称代名詞の前の位置に文法的に同じ資格のものを併置する形で出現する事が可能である。

#### 1.4 小括

この章では満洲語が如何なる言語であるかを確認し、17, 18 世紀の満洲語が置かれていた状況を概観すると共に、分析する格標識と資料について重要事項を説明した。属格標識を中心に格について述べ、名詞と形容詞の区別について少なくとも「モノ」を表すか「属性」を表すかという意味の上での違いは認められている事と、両者が統語上異なる振る舞いをする事を確認した。

## 第2章 -iの表記と形態に関する問題

属格の機能を考える前に、満洲語の格標識-iが niとも綴られる事と、具格と属格の両方に同じ形で用いられている事に対して、若干の考察を行いたいと思う。

### 2.1 ngの後で格標識-iをniと綴るのは正書法上の問題か異形態か

まず、ngで終わる語(殆どが漢語からの借用語である)の後では(17世紀の最初期の表記を除くと)多くの場合、格標識-iがniと綴られる事に関して考察する。

#### 2.1.1 ngの後の格標識-iに関する問題の所在

ngの後でのみ格標識-iがniと綴られるようになった事が正書法上の問題であるという主張がある。中村(2008: 3)は以下のように述べる。

満洲語の表記を作り上げる際にモンゴル語の正書法を参照し、「-n」で終わる名詞の後の助詞を「i【本稿の表記では-i】<sup>39</sup>」と綴りつつ、「[ni]」と読む習慣を踏襲した。「天聡汗銭」において【nの後の-iが】「ni」と綴られたのは、実際の発音通りに表記した全くの例外である。「-ng」の後で「ni」と綴ることについては二つの点を考慮しなければならない。その一は、吉池(2008)にも指摘されたように、満洲語の「-ng」が実際には「-n」と発音された可能性が高いこと。そのため、発音通りに「ni」と綴られた。その二は、モンゴル語において、「-ng」の後の「i」や「un」は「gi」「gun」と読まれるため、モンゴル語の正書法に慣れ親しんだ者に誤解なく「[ni]」と読ませるためには、どうしても「i【-i】」ではなく、「ni」と綴る必要があったということである。このようにして、満洲語の属格助詞は「-ng」の後で「ni」、それ以外では「i【-i】」と綴る規則が出来上がったと考えられる。

整理すると以下の通りである。

---

<sup>39</sup> 【 】内は筆者による。以後同様。

1. 満洲語で、語末の ng は n 同様に [n] と発音された可能性が高い。
2. モンゴル文語で、語末の ng の後の格標識 i は [gi] のように読まれる。
3. 満洲語において ng の後で ni と書き、-i と書かないのは、モンゴル文語に慣れた者に誤解なく、ng ([n] と発音する) の後の格標識-i を、[ni] と読ませるためである。

ここではこのうち3について考察する。モンゴル文語に慣れた満洲語の書記<sup>40</sup>が一番多かった17世紀初めの最も古い満文資料『満文原檔』(1607～1636年の記事<sup>41</sup>)では格標識-iはngで終わる語の後でも、-iと綴られていた事が早田輝洋(2012: 96)で以下のように指摘されている。(原文旧字体)

属格標識は、ng 以外に続く時は-i で ng に続く時は ni であると一般に記述されているが、原檔満洲語では第 V 冊(ヌルハチ時代【第一章の表1参照】の終わり)までは、そういう規則性は見られない。そこでは ng -i 連続 295 例に対して ng ni 連続は 19 例である。

続いて、『満文原檔』天聰元年(1627年)にホンタイジ時代になってからは ng の後での ni が顕著に多くなり天聰6年(1632年)の満洲文字改革以後の2冊では ng ni 率が90%を超える事が述べられている。

ng の後の格標識-i が ni と綴られるのが、格標識-i を含む音節を正しく読ませるためだけの正書法上の工夫(発音通りの表記を行い-i と書くとモンゴル文語に慣れた者には [gi] と読まれてしまう)に過ぎないとすると、最初期の満洲語資料でこそ ng の後で ni と綴る事が必要であろう。ところが、ng の後で ni と綴る事が定着するのはホンタイジ時代である。満洲文字が使用開始されたのは1599年とされているから、30年近い時間がたってようやく採用されているのであって、モンゴル文字を使用していた満洲人が誤読をするのを避けるための正書法上の工夫を導入するには時期が遅すぎるように思える。

この ng のあとの ni という綴りについて早田輝洋(2012: 107)は「-i → ni 規則が起り【略】

<sup>40</sup> 第一章で述べたとおり、満洲族はもともと、書き言葉としてモンゴル文語を用いていた。

<sup>41</sup> ほぼ前半の5冊がヌルハチ時代の記事で後半の5冊がホンタイジ時代(最後の2冊が満洲文字改革以降)の記事である。

音声として[ni]で実現してそのまま続いたように思われる」(原文旧字体)と述べる。純粋な正書法上の工夫ではなく ng の後で格標識-i が[ni]で実現する規則が生じたという考えである。しかし元々満洲語には無かった語末の ng の後で何故そのような規則が生じたのかは述べられていない。

### 2.1.2 nの前であれば固有語中に ng は存在する

この問題を考察する上で、重要な手がかりとして、満洲語の固有語においても、ng が語中で n の前であれば存在しているという事実を挙げたい。(46)のとおり、満洲語では語中で VngnV と VnV がそれぞれの単語毎にはっきり書き分けられており表記の混乱は知られていない。

(46)	niy <u>eng</u> niyeri	「春」	<u>eniye</u> 「母」
	nion <u>g</u> niyaha	「雁(などの鳥)」	funiyagan 「度量」, <u>aniya</u> 「年」

この(46)の書き分けを見ると満洲語には語中で ngn と n の対立はある事がわかる。語中で対立が無いならば、共に n と表記すれば良いのであって、ngn という綴り<sup>42</sup>が採用されるとは思えないから、この表記が始まった時期には ngn と n の対立があったと考えられる。

『満文三国志』中でも明らかに表記の混乱は見られない。資料中のこれらの語の綴りを見ると niyengniyeri の 50 例に対して niyeniyeri, niyenniyeri は共に無く、niongniyaha の 7 例に対して nioniyaha, nionniyaha は共に無い。eniye の 47 例に対して engniye, enniye は共に無く、funiyagan の 9 例に対して fungniyagan, funniyagan は共に無く、aniya の 566 例に対して angniya, anniya は共に無い。

ng の後の ni は-i を [ni] と読ませるためというよりも属格形、具格形の時だけでも-i の前の語幹末の ng を正しく [ŋ]と満洲語話者に発音させるための工夫であった可能性がある。一方で自然な音変化の結果、ni という異形態が-i に存在していた可能性もある。

<sup>42</sup> 現代シベ語を、参考までに参照すると、山本(1969)による 20 世紀のシベ語の発音では満洲語の niyengniyeri は [ɲ(i)ɛŋɲiɛrj] で、niongniyaha は [ɲɯŋɲax] である。実際に満洲文字の ngn の部分で n の前の ng が [ŋ] と発音されている。

## 2.1.3 語末 ng と語末 n の後の例外的な綴り

その一方で ng の後の ni という形は『満文三国志』では徹底されていない。少数だが例外が見られ、ng で終わる語の後に -i と書かれた例が 16 例ある。以下に示す。

表 6 ng で終わる語の後に -i と書かれた例

用例	原漢語	具格/属格の別	出現箇所
g'ao·ling -i	高陵	属格	三 01:009a
guwan·gung -i	關公	属格	三 06:027a
ioi·k'ang -i	餘杭	属格	三 08:063b
genggiyen gung -i	明公 <sup>43</sup>	属格	三 08:072b
jing·šang -i	荆陝	属格	三 09:033b
jang·sung -i	張松	属格	三 12:086b
uling -i	武陵	属格	三 15:066b
fan·ceng -i	樊城	属格	三 15:069b
siyan·fung -i	先鋒	属格	三 15:070b
guwan·ping -i	關平	属格	三 15:076b
fan·ceng -i	樊城	属格	三 15:079b
lioi·meng -i	呂蒙	属格	三 16:012b
sioi·šeng -i	徐盛	属格	三 18:016a
g'ao·ding -i	高定	属格	三 18:024b
dung -i	洞	属格	三 18:060b
siliyang -i	西涼	属格	三 19:021b

すべて属格の -i であり具格の -i の例が無いが、これは ng で終わる語が漢語であり、固有人名と地名が大部分を占めている事が原因であると考えられる。満洲語では固有人名(及びそれに準ずる人間名詞)や地名は通常は具格では用いられない<sup>44</sup>。表 6 の異なり全 15 の

<sup>43</sup> 漢語「明公」は「明」の部分は満洲語の固有語 genggiyen「明るい」と訳されている。

<sup>44</sup> 被使役者は対格か与格を、場所は与格を、経路は沿格をそれぞれ用いる。

語について -i が付加された例と ni が付加された例の内訳を見ると以下の表 7 のとおりである。

表 7 -i が付加された例と ni が付加された例の内訳

用例	-i と表記	ni と表記
g'ao · ling -i/ni	1	4
guwan · gung -i/ni	1	107
ioi · k'ang -i/ni	1	0
genggiyen gung -i/ni	1	33
jing · šang -i/ni	1	1
jang · sung -i/ni	1	11
uling -i/ni	1	0
fan · ceng -i/ni	2	15
siyan · fung -i/ni	1	4
guwan · ping -i/ni	1	5
lioi · meng -i/ni	1	18
sioi · šeng -i/ni	1	4
g'ao · ding -i/ni	1	14
dung -i/ni	1	63 <sup>45</sup>
siliyang -i/ni	1	18

fan · ceng 「樊城」が二例ある<sup>46</sup>が、特定の語において ng の後で -i と綴ると決まっているわけではない。属格標識が付加された例が大量にある特定の ng で終わる語において、ni ではなく -i が付加された例がその大部分を占めるという事は無く、逆に ng の後で -i と綴る用例がある複数の語において ni が付加された例が多数見られる。

<sup>45</sup> dung のうち(「東」などを含まない)「洞」のみの度数である。

<sup>46</sup> 最後の音節だけに注目すると、さらに gung 「公」で終わる語と、ling 「陵」で終わる語が二語ずつある。しかし、それを考慮してもこれらの例に一部の語への極端な偏りは全く見いだせないと言える。

『満文三国志』中で ng で終わる語の後で-i と書かれた例が 16 例であるのに対して ng で終わる語の後で ni と書かれた例は(早田輝洋 2012: 97 では 4085 例と報告されているが筆者が数えると)4016 例である。

また、n で終わる語の後でも ni と書かれた例が 5 例ある。以下に示す。

表 8 n で終わる語の後でも ni と書かれた例

用例	和訳	具格/属格の別	出現箇所
fon ni	時の	属格	三 05:059b
hecen ni	城の	属格	三 09:010b
sirdan ni	矢弾の	属格	三 15:078b
nan・jyūn ni	南郡の	属格	三 15:102a
yargiyan ni	本当に	具格	三 22:021b

表 8 の 5 つの語について-i が付加された例と ni が付加された例の内訳を見ると以下、表 9 のとおりである。

表 9 -i が付加された例と ni が付加された例の内訳

用例	-i と表記	ni と表記
fon -i/ni	15 <sup>47</sup>	1
hecen -i/ni	628	1
sirdan -i/ni	40	1
nan・jyūn -i/ni	20	1
yargiyan -i/ni	162	1

『満文三国志』中 n で終わる語の後で ni と書かれた例が 5 例であるのに対して n で終わる語の後で-i と書かれた例はおよそ一万数千例ある。

<sup>47</sup> 分かち書きせずに語幹に続けて表記したもの 2 例を含む

## 2.1.4 2.1節のまとめ

満洲語には語中では綴りの上で **ngn** と **n** の書き分けが行われており、**n** の前では **ng** を [ŋ] と発音出来たと考えられる。すなわち **ng** の後に **ni** という形があれば満洲語話者は語幹末の **ng** を正しく [ŋ] と発音できたと考えられるのである。従って、**ng** の後で **-i** を **ni** と綴るのを、モンゴル文語に慣れた者に **-i** の音節を [ni] と発音させる事だけが目的の、正書法上の工夫であると考えべきではない。借用語の語幹末の **ng** を、格標識 **-i** が続いた時に正しく [ŋ] と発音するために、**ng -i** を [ŋni] の様に発音する人為的な発音上の工夫が当時の音声言語で用いられる事がしばしばあり、それが書き言葉にも採用されていた可能性と、実際に音声言語においても **ng** の後の **ni** が異形態として存在していた可能性の両方が考えられる。いずれにせよ、当時の音声言語で起きていた現象を反映した綴りである。

『満文三国志』において、**ng** の後でのみ **ni** と綴る規則の例外は、割合としては極々僅かなものである。少なくとも正書法上は **ng** の後でのみ **ni** と綴るのが習慣になっているようである。しかし、他の音で終わる普通名詞の後でこのような混乱は全く見つかっていないから、例外的な綴りは、このような綴りをした話者の言語において語末で **n** と **ng** の音韻論的対立が無かった事を示唆するものであるとも言えよう。『満文三国志』が書かれた17世紀半ばの時期において **ni** が当時の音声言語において異形態として定着していたとは言い切れない。

## 2.2 -iの分かち書きについて

次は、属格の-iと異なり具格の-iは語幹から離して書かれるのか検証する。本稿では原則として格標識-iは語幹に続けて書かれた場合でも原則として「-i(ハイフン+i)」と表記するがこの2.2節でのみ、必要に応じて、-iが分かち書きされない場合にハイフンを書かずに語形を示す事がある。

### 2.2.1 -iの分かち書きに関する問題の所在

同じ表音文字で書かれるのだから属格の-iと具格の-iは同音であったと考えるのが自然であるが、愛新覚羅(1985)には具格の-iは通常は語幹から離して書かれるという記述がある。愛新覚羅(1985: 104 拙訳)は「造格助詞【本稿で言う具格標識に同じ】-iはそれ自体の独立性が強く、個別の語を除き、接続する体言に続けては書かれない」と言う。そして以下の二例をその例として挙げている。

- (47) a.       tampin   -i  
              壺       -i  
              「壺を用いて」
- b.       moro     -i  
              碗       -i  
              「碗を用いて」

この記述では、例外の「個別の語」が何なのか書かれていないから、この記述が正しいか否かの検証は不可能である。また、時代によって話者の文法が異なる可能性もある。

したがって以下の考察は、決して愛新覚羅(1985)に対する批判というわけではない。『満文三国志』の満洲語において属格と具格が(音声上あるいは綴り上)完全に同じ形をしていたのか否かという問題意識の下で行う。具格に関して「接続する体言に続けては書かれない」という記述がある以上、以下の2つの検証は意義がある事だと考える。

- a. 満洲語が衰退する以前、書き言葉に当時の音声言語の特徴がよく反映されていたと考えられる時代の文献において、具格が分かち書きされる例があるのか検証する

- b. 属格と具格両方にわたってそれぞれ複数回用いられている単語において、属格と具格では格標識-i が語幹から離して書かれる度合いに、「接続する体言に続けては書かれない」と言えるほどの極端な違いがあるのか検証する

仮に分かち書きの有無が属格と具格で異なっていたとしても、-i を機能の違いに基づいてかき分けたに過ぎない可能性が高いが、母音弱化の有無といった音声上の差異を反映している可能性も否定できないからである。

### 2.2.2 分かち書きされない具格の例

『満文三国志』では具格の-i でも分かち書きされない事がある。そのような例を見つける事は全く困難ではない。例えば、『三国志演義』という小説の性格上繰り返し出て来る arga 「計略」という語は具格の-i を伴って用いられる事が非常に多い語である。そしてこの資料を一読すれば分かち書きされない argai 「計略でもって」という形を多数見る事が出来る。以下(48), (49), (50)にその語幹と属格標識の間にスペースの無い例のうち一部を示す。

- (48) jug'oliyang **arga-i** sun·cuwan be jili banji-bu-ha.  
 諸葛亮 計略-i 孫・権 ACC 怒り 生まれる-CAUS-PERF.ADN  
 「諸葛亮が計略で孫権を怒らせた。」  
 原漢語: 諸葛亮智激孫権 三 09:053b
- (49) kungming **arga-i** syma·i be bedere-bu-he.  
 孔明 計略-i 司馬・懿 ACC 撤退する-CAUS-PERF.ADN  
 「孔明が計略で司馬懿を撤退させた。」  
 原漢語: 孔明智退司馬懿 三 19:092b



表 1 1 suhe 「斧」 + 格標識-i

	属格	具格	合計
suhe -i (分ち書き)	2	1	3
suhei	0	1	1
合計	2	2	4

もともと suhe 「斧」に格標識-i が付加された例は全部で属格と具格 2 例ずつしかないのだから傾向は不明であるが、この用例からは「具格の-i は分ち書きされる」という主張をする事は不可能である。

次に futa 「ロープ」に格標識-i が付加された例を示す。この語では具格用法 8 例中 6 例が分ち書きされない futai である。

表 1 2 futa 「ロープ」 + 格標識-i

	属格	具格	合計
futa -i (分ち書き)	2	2	4
futai	1	6	7
合計	3	8	11

あまり用例の多い語ではないが、この例の限りではむしろ具格は分ち書きをされない様に見える。

もっと用例が多い単語で見てみよう。以下は gida 「槍」の用法である。

表 1 3 gida 「槍」 + 格標識-i

	属格	具格	合計
gida -i (分ち書き)	16	15	31 <sup>49</sup>
gidai	3	1	4
合計	19	16	35

<sup>49</sup> 具格か属格か不明な 1 例は除いた。

この語では具格だけ見ると1例の例外を除く15例が *gida -i* と分かち書きされている。従って、この *gida* という語において具格は分かち書きされる傾向が強いと言えるが、属格もやはり分かち書きされる事が多いので、「属格と異なり具格は分かち書きされる」とは言えない。

以下は *loho* 「剣」の用法である。

表 1 4 *loho* 「剣」 + 格標識-i

	属格	具格	合計
<i>loho -i</i> (分かち書き)	11	14	25
<i>lohoi</i>	4	1	5
合計	15	15	30

この *loho* でも先ほどの *gida* と同様である。具格だけ見ると1例の例外を除く14例が *loho -i* と分かち書きされているから、この語において具格は分かち書きされる傾向が強いと言えるが、属格もやはり分かち書きされる事が多いので、やはり「属格と異なり具格は分かち書きされる」とは言えない。

#### 2.2.4 2.2節のまとめ

原則として具格が必ず分かち書きされる、というのはこの共時態に関しては全く不適切な記述である。具格が属格と違って顕著に分かち書きされる、という明らかな傾向を見る事も出来ない。

### 2.3 小括

本章では格標識-iの形態と綴りの上での二つの問題を考察した。

-iがngで終わる語の後ではniと綴られる事に関しては、誤って読まれる事を防ぐための単なる正書法上の工夫ではなく、当時の音声言語で起きていた現象を反映した綴りであると考えられる。ただし、完全な異形態とも言い切れない。

満洲語において属格の標識と具格の標識が分かち書きの有無も含めて、同じ形をしているか否かという問題に関しては、両者は殆ど同じであると言える。形態素自体が全く同じ形であるのみならず、語幹に続けて書かれるか分かち書きをされるかという点でも、属格標識か具格標識かの判断が可能な程の顕著な差は無い。属格標識と具格標識を分ける根拠は音形ではなくて、-iが後続した名詞(句)の、他の語句との関係そのものであると結論づけられる。1.3.1節で説明したとおり、-i(およびni)のうち連体修飾要素や、従属節の主語を表し、連用修飾をしないものが属格という事になる。

### 第3章 「動詞未完了連体形+i」および「助数詞(的名詞)+i」 の偏った分布

属格標識-i が以下のように一部の連体修飾で使用されない事が、漢語の影響である可能性が津曲(1992)に述べられている事は既に述べた。

(51)=(2) b)     muke     ihan  
                  水        牛  
                  「水牛」

原漢語: 水牛

金 01:35a

しかし、何らかの表現において、時代が下ると共に属格が有意に使用頻度を低下させている事は報告されていない。-i は(属格標識と命名されるにあたって一般的な)主要部の所有者を表す用法においては満洲語の全時期を通して用いられている。しかし、本章で報告するとおり、一部の表現においては-i の分布に偏りが見られる。これは-i の用法の変遷である可能性がある。本章では動詞未完了連体形につく属格標識および、助数詞(的名詞)につく属格標識において、『満文三国志』(1650年序)の中で分布に偏りが見られる事を指摘する。そして、『満文金瓶梅』(1708年序)と比較する事により、その偏りの一部は満洲語の時代差による可能性がある事を指摘する。

#### 3.1 本章で扱う用法

北京の満洲語が衰退を始めた時期に書かれた雍正 8 (1730) 年序の満洲語教科書『清文啓蒙』3巻7丁裏に、前が必ず属格標識になるという趣旨の記述が以下の語についてなされている。

(52)     emgi 「共に」, baru 「へ向かって」, jalin 「ために」, adali 「如し」, gese 「如し」, teile 「だけ」, cala 「彼方」, ciha 「勝手」, ebsihe 「限り」, gubci 「全体」, canggi 「だけ」

前の語が必ず属格形になるなら「属格支配の後置詞」に見えるが、これらの後置詞のうち、





### 3.2 分布

#### 3.2.1 動詞未完了連体形+i

『満文三国志』中の「動詞連体形の属格形」は以下の通りである。

表 1 5 『満文三国志』中の全「動詞未完了連体形+i」

	-i	∅	合計
-rV -i/∅ gese 「如し」	12	195	207
-rV -i/∅ adali 「如し」	7	144	151
-rV -i/∅ teile 「だけ」 <sup>50</sup>	6	5	11
-rV -i/∅ ten 「限り」	1(第6巻)	0	1
-rV -i/∅ giyan 「理」	1(第8巻)	27	28

このうち-rV -i/∅ teile, -rV -i/∅ ten, -rV -i/∅ giyan は度数が低いから、これらは以降の議論から除く。

表 1 6 -rV -i/∅ gese および, -rV -i/∅ adali における-iの分布

巻	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	合計	
-rV-i gese	2	4				1					1	2	2													12
-rV-i adali	3	2					1							1												7
-rV gese	16	8	18	8	9	10	6	5	16	11	10	13	5	9	9	4	4	4	10	3	5	4	3	5		195
-rV adali	9	9	10	3	2	2	1	11	14	9	2	9	4	7	7	5	2	2	5	2	4	7	6	12		144

表からわかるとおりこの環境で-iは15巻以降に出現しない。

<sup>50</sup> teile の前の動詞未完了連体形に関しては(総度数が11と低いからはっきりした事は不明であるが)特に-iの分布に前半と後半とで偏りを見いだす事は出来ない。『満文金瓶梅』でもこの環境で-iが2例現れている。-iが現れない例は6例である。『満文三国志』よりも-iが用いられる率は低下しているが、総度数が少ないので他の-iの偏りと同様の現象あるかは不明である。

この 15 巻以降という位置は「雨が降る如く」という表現で後置詞 *gese* が用いられなくなる位置に一致している。

表 1 7 「雨が降る如く」を表す表現の分布

巻	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	合計
agara (-i) adali	1	3						1						1		1			1		2	4			15
agara (-i) gese	1	2	1	2	1	1	1		1	1	1	1	1	1											15

本章の議論では暫定的に 14 巻と 15 巻の間で『満文三国志』を二つに分ける事とする。

### 3.2.2 助数詞(的名詞)+i

次に[数詞+助数詞(的名詞)+i]の分布を見る。「数量を表す名詞句」は様々なものがあるが、『満文三国志』中で分布の分析ができる程度に高い頻度で出現している表現は軍隊の部隊の数を表したものに限られる。

表 1 8 数詞 + *gargan*<sup>51</sup>(枝) -i / *cooha* 「～支隊の兵」における -i の分布

巻	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	合計
数詞 + <i>garhan/gargan</i> -i <i>cooha</i>	1	2	3	9		2		2	2	1	2	4	5	7	17	1	5	5	12	14	2	10	2	4	112
数詞 + <i>garhan/gargan</i> <i>cooha</i>												1					2	1	4	2	4		1	3	18

「～支隊の兵」の表現において作品全体を通して -i が用いられている。-i が使用されない例は第 12 巻に一例あり、残り 17 例は第 15 巻以降である。

<sup>51</sup>*gargan* 「枝」は *garhan* と綴られる。

表 1 9 数詞 + baksan -i /Ø cooha 「～隊の兵」における -i の分布

巻	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	合計
数詞 + baksan -i cooha	5	6	8	2	2	2	10	4	3	7	8	3	6		1	6	8	4	17	4	5	2	4		117
数詞 + baksan cooha	1			2	2	1		1	1		1		2	1		1	3	6	2	7	1	2	11		45

「～隊の兵」の場合は-i が用いられる例も用いられない例もほぼ作品全体を通して見られる。程度としては第 15 巻以降の方が-i が用いられない例が多い傾向にある。

### 3.2.3 分布の偏り

さらに、3.2.1 と 3.2.2 で見た表現の偏りをみる。以下、表 2 0、表 2 1、表 2 2 において、1 ～ 14 巻では-i の出現度数は実測値が期待値を上回っており、15 ～ 24 巻では-i の出現度数は実測値が期待値を下回っている。

表 2 0 表 1 6 の分布の実測値と期待値

括弧 ( ) 内は期待値

	1-14 巻	15-24 巻	合計
-rV-i gese/adali	19 (13.5)	0 (5.5)	19
-rV gese/adali	236 (241.5)	103 (97.5)	339
合計	255	103	358

表 2 1 表 1 8 の分布の実測値と期待値

括弧 ( ) 内は期待値

	1-14 巻	15-24 巻	合計
数詞 + gargan/garhan -i cooha	40 (35.3)	72 (76.7)	112
数詞 + gargan/garhan cooha	1 (5.7)	17 (12.3)	18
合計	41	89	130

表 2 2 表 1 9 の分布の実測値と期待値

括弧 ( ) 内は期待値

	1-14 巻	15-24 巻	合計
数詞 + baksan -i cooha	66 (56.3)	51 (60.7)	117
数詞 + baksan cooha	12 (21.7)	33 (23.3)	45
合計	78	84	162

これらの3つの表全てにおいて、有意に偏った(表20  $p=0.0027$ , 表21  $p=0.012$ , 表22  $p=0.0008$ ; Fisher 正確確率検定, 両側検定, 有意水準  $p < 0.05$ )分布が見られ、「属格の使用/不使用」と「14巻以前/15巻以降」の二つの要因の間には関連性が示唆される。

### 3.3 『満文金瓶梅』(1708年序)との比較

ここでみた*-i*の出現状況を『満文金瓶梅』(1708年序, コーパスサイズは『満文三国志』とほぼ同じ)と比較する。以下に本稿で分析した未完了連体形+iの度数の比較を示す。(『満文金瓶梅』には「軍の部隊の数」を表した[数詞+助数詞的名詞]は無い)

表23 gese, adaliの前の未完了連体形+iの頻度

	三国志 1-14巻	三国志 15-24巻	金瓶梅
-rV -i gese	12	0	0
-rV -i adali	7	0	0
-rV gese	144	51	104
-rV adali	92	52	180

『満文三国志』15-24巻と『満文金瓶梅』はこの環境での*-i*の使用/不使用に関して同様の傾向を示す。この分布は本稿1.2節で見た「情報」を表す際の medege と mejige の分布でも同様の結果になる。

表24 「情報」を表す語の分布

	三国志 1-14巻	三国志 15-24巻	金瓶梅
medege/medeche	14	0	0
mejige	141	130	174

gese, adali の前の未完了連体形における『満文三国志』の後半部分の-i の不使用は満洲語の時代差である可能性がある。しかし文献の途中で時代差が顕現するのは奇妙である。『満文三国志』の翻訳がかなりの時間をかけて行われ、翻訳者達が途中で世代交代した可能性がある。ただし、ある巻の翻訳を境に急に入れ替わったという性格のものでもないようだ。さらなる分析が求められる。

### 3.4 小括

本章では格標識-i の用法のうち一部のものが『満文三国志』の後半部分で減少している事を示した。前の要素が動詞連体形である場合は-i の使用は稀であり、『満文三国志』の中でも分布が偏っている事から、これらの-i の使用に個人(あるいは世代)差がかなりあった可能性があると思われる。『満文三国志』の後半部分の傾向が、後の『満文金瓶梅』でも継続しているという事実は、この環境での-i の減少という通時的変化があった可能性を強くするものである。

数量を表す名詞句の属格形は偏っているが、原因は様々な事が考えられるのであって今の所それを絞るほどの材料は出ていない。他の文献との比較も行えておらず、この出現の傾向が時間順序どおりであるかどうかを断定する事は慎重でなければならない。

## 第4章 「同格の属格」について

本章では、「属格主語」や、「コンピュータが音形を持たない場合」について、従来の記述が不十分な点を指摘した上で、「同格」を表すとされている属格標識が、無音のコンピュータで終わる従属節の主語を表す属格標識である事を示す。

満洲語の格標識 *-i* はかなり多機能に見えるが、*-i* の機能自体は連体節の主語の標識、連体修飾の標識、具格の標識に過ぎず、それほど特異なものではないと結論づける。

### 4.1 「同格の属格」

*-i* は様々な意味関係の連体修飾に使用可能である。だが、それだけの範囲ならば単に「連体修飾を表す」と一般化して説明できる。

問題なのは、一方を他方の連体修飾要素とする必要が無いように見える用法である。満洲語には同じものを指す二つの名詞句の連続でも第一名詞句が属格になる用法がある。

(61)	dobori	dari	kemuni	<u>li·fung</u>	<u>jang·ji</u>	<u>hiya·heo·hiowan</u>	<u>-i</u>
	夜	ごと	ずっと	李・豊	張・緝	夏・侯・玄	-i
	<u>ilan</u>	<u>nofi</u>	ergen be	tooda-me	gaji		
	三	人	命 ACC	返す-IMPF.CONV	くれ <sup>52</sup>		
	se-me		jide-re	be	sabu-mbi.		
	言う-IMPF.CONV		来る-IMPF.ADN	ACC	見える-IMPF.CONCL		

<sup>52</sup> この語はおそらく動詞 *gaji*-「持って来る」と関係があるが、早田輝洋(1993: 112)は「*gaji* と *gaju* は等しく、共に *gaji*-の命令形だとしている辞書が殆どであるが、正しくない【中略】。少なくとも共時的には、*gaji*-の命令形は *gaju* であり、*gaji* は意味がずれている。」と述べる。*gaji*-「持って来る」という動詞は *ji*-「来る」という動詞に由来すると思われる音節を語幹末に持っているがこのような動詞の命令形は、満洲語で一般的な「語幹そのままの形」ではなくて *jio* または *ju* で終わる形になる。(例：*ji*-「来る」→ *jio*「来い」、*gaji*-「持って来る」→ *gaju*(又は *gajio*)「持って来い」、*afanji*-「攻めて来る」→ *afanju*「攻めて来い」、*dosinji*-「入って来る」→ *dosinju*「入って来い」)

「每晚ずっと李豊，張緝，夏侯玄の三人が  
命を返してくれと言いに来るのが目に映る。」

原漢語: 每夜只見李豊，張緝，夏侯玄，三人索命。 三 22:077a

(62) syma·joo -i jalingga kiyangkiyan

司馬・昭 -i 奸な 英雄

ts'oots'oo ci daba-habi.

曹操 ABL 超える -PERF.CONCL

「奸雄の司馬昭は曹操を超えている。」

原漢語: 司馬昭姦雄過於曹操。 三 23:068a

Doerfer (1962 : 48), 早田輝洋 (2005 : 128) 等で, この様な例は「同格」(Doerfer では Apposition) であると扱われてきた<sup>53</sup>。一方の名詞句が, それがもう一方の名詞句の所有者である場合 (すなわち典型的な属格の用法) と同じ形態論的操作を受けている点で, 「同格の属格」は (63) のようなアルタイ諸言語に一般的に見られる名詞句の併置による「同格」と異なっている<sup>54</sup>。

(63) sakda niyalma bi

老いた 人間 1.SG.NOM

「老人の私 (直訳: 老人, 私)」

原漢語: 老夫 三 03:018b

<sup>53</sup> 早田清冷 (2013) でも同様に「同格」として扱った。

<sup>54</sup> Shibatani (2013) では, 日本語の所謂格助詞の「の」も, 所謂形式名詞の「の」も共に体言化を行うものであるという。この考えでは「コレラ患者の大学生」(西山 2003) は 2 つの体言「コレラ患者の」と「大学生」からなるという解釈になる。『満文三国志』の満洲語の場合, 格標識-i には新たな名詞語幹を作る用法および日本語の形式名詞や補文標識の「の」にあたる用法は無いから, この共時態で-i を体言化標識であると解釈する根拠は無い。

#### 4.1.1 「同格の属格」という記述の問題点

以下では「同格の属格」なる従来の記述の問題点について述べる。

##### 4.1.1.1 属格の用法としての「同格」の定義不足

第一に、属格の用法における「同格」の定義が不明である事が問題である。Doerfer (1962:48), 早田輝洋(2005:128)は、満洲語の「NP<sub>1</sub> *i*-i + NP<sub>2</sub> *i*」(*i*: 同一指示)という形で実現する構造における *-i* の用法を「同格」とであると説明しているが、(所有格のような)狭義の属格とは異なる「同格」の属格であるという以外には「同格の属格」なるものに関する詳細な定義も説明も行われていない。従属部と主要部が同一物だと判断でき、広義の「所有関係」とは言い難いものが「同格」として挙げられているだけである。典型的には「同格」は、二つの名詞(句)が別々の指示対象を持たなければ良いというだけではなく、亀井他編(1996:978)に「ある名詞が他の名詞と単に(何らかの機能語をおかずに)併置(coordinate)され、その名詞の意味を限定する」<sup>55</sup>とあるような、印欧語に一般的に見られる、統語論的にはっきり定義できる現象を言うが、この定義であると従属部に主要部との格の一致以外の原因で属格標識が現れた時点で「単に併置」ではないから、それは「同格」などではあり得ない事になる<sup>56</sup>。早田輝洋(2005:128)は、同格の属格について、men-i (1.PL-i) ahūn deo(兄弟)「我々兄弟」は「{我々の{兄や弟}}という「所有の属格」と構造としては同じものなのかも知れない。」と述べるが、同じと解釈するほうが好ましいとは主張されておらず、「同じものなのかも知れない」という根拠も挙げられていない。「同格の属格」が名詞句間の意味関係が違っただけで「所有の属格」と同じ統語的機能のものなのか、狭義の属格とは統語的機能も異なるものなのか、従来の記述ではどちらであるとも述べられていない。

##### 4.1.1.2 現代日本語のコピュラ連体形「の」とは異なる

第二に、満洲語の「NP<sub>1</sub> *i*-i + NP<sub>2</sub> *i*」及び、それに似た構造・用法を持つ他言語の表現が、

<sup>55</sup> Matthews(2014: 24)には同格(apposition)について"A syntactic relation in which an element is juxtaposed to another element of the same kind. Especially between noun phrases that do not have distinct referents"とある。

<sup>56</sup> この定義では英語の the two of us も日本語の「妹の花子」も「同格」ではなくなる。

いずれも「同格の属格」という名称で呼ばれる事があるが、それらの性質は同一ではなく、より厳密な記述を要する、という問題がある。特に、満洲語の「NP<sub>1</sub><sub>i</sub>-i + NP<sub>2</sub><sub>i</sub>」は、定の名詞句の位置を見る限り、日本語で「同格の属格」とは本質的に同じ現象とは思えず、「同格の属格」という範疇の一般言語学的な有効性に疑問がある。以下、この事を説明する。

日本語でも、所有関係を表す「[NP<sub>1</sub> + 属格標識] + NP<sub>2</sub>」と一見して同じに見える構造が、NP<sub>1</sub> と NP<sub>2</sub> が同一指示でも高い生産性で用いられる<sup>57</sup>。しかし、満洲語の「同格の属格」は語順に特徴があり、定の名詞句が第一名詞句になる傾向がある。これは日本語の類似の現象とは語順が逆であり、この現象の本質に関わる重要な相違点であると思われる。

現代日本語および古典日本語の記述において、従来は助詞であるとされてきた「の」の一部を「コピュラの連体形」であるとする解釈が日本内外の少なくない研究者に採用されている。時枝(1950: 183, 1954: 92)はこの立場であり助動詞の連体形としての「の」を認める。西山(2003)も現代日本語について連体助詞の「の」とは統語機能が異なるもう一つの「の」を認める。西山(2003:16-43)の説明では「コレラ患者の大学生」の「の」はコピュラの連体形「デアル」に相当する形式で、連体助詞である「洋子の首飾り」の「の」とは前後の名詞句間の意味関係のみならず「NP<sub>1</sub> の NP<sub>2</sub>」の基底形における統語構造からして全く異なるという。さらに、このような NP<sub>1</sub> について「[NP<sub>1</sub> デアル] という叙述的な意味をもつ」(同書 21 頁)がゆえに「NP<sub>1</sub> デアル NP<sub>2</sub>」タイプでは NP<sub>1</sub> の位置に、叙述性を持たない定の名詞句が現れる事は許容しがたいと主張する。

(64) ?この患者の大学生

?あいつの政治家

?君の俳優

?山田洋子の音楽家 (西山 2003: 21, 許容度も西山による)

確かに、このような「の」は語順の制約においてコピュラの連体形「デアル」と同様な

<sup>57</sup> 日本語の「の」と満洲語の-i の組織的な対照研究は今後の課題とし、ここではこのような「同格の属格」 appositive genitive と呼ばれうる現象に限定して、定の名詞句の位置に関わる問題について対照する。

特徴を有しているようだ。筆者の内省では(64)の例は第一名詞句と第二名詞句が別人(所有関係)の読みでない場合は語順を逆にして定の名詞句を第二名詞句にしないと許容し難い。語順を逆にした場合「の」は「である」に置き換える事ができるが、(64)の語順のままだと「の」を「である」に置き換えても不自然である。

- (64)'
- |       |                |        |                 |
|-------|----------------|--------|-----------------|
| [大学生] | {<br>の<br>である} | [この患者] | ?[この患者]である[大学生] |
| [政治家] | {<br>の<br>である} | [あいつ]  | ?[あいつ]である[政治家]  |
| [俳優]  | {<br>の<br>である} | [君]    | ?[君]である[俳優]     |
| [音楽家] | {<br>の<br>である} | [山田洋子] | ?[山田洋子]である[音楽家] |

しかし、満洲語の「NP<sub>1</sub> であり、かつ NP<sub>2</sub> でもあるモノ」を表す「NP<sub>i</sub> の + NP<sub>2 i</sub>」(i: 同一指示)は筆者の管見の及ぶ範囲では、ほとんどの例で NP<sub>1</sub> が定の名詞句である。特に以下のように NP<sub>1</sub> が人称代名詞である例が多い。これらの-i がコピュラの連体形であるとは考えられない。

- (65)      jiyangjiyūn          ai          turgun      de  
 将軍                      何の          理由          DAT  
min-i      sakda      niyalma      be          wakala-mbi.  
 1.SG-i    老いた    人間          ACC          咎める-IMPF.CONCL

「将軍は何故、老人の私を咎めるのだ？」

原漢語: 将軍何故反怪老夫耶。

三 02:051b

(65)でも意味を考えて和訳はコピュラの連体形「デアル」に相当する「の」を用いて「老人の私」(=老人デアル私)としたが満洲語の語順は「私の老人」である事に注意されたい。

日本語の「私の老人」は「私」と「老人」を同一指示とする読みでは通常は非文となる<sup>58</sup>。以下、(66)～(69)の例も、もとの満洲語の語順のまま、満洲語の属格標識-iを「の」と直訳すると日本語で同一指示の読みは困難である。

- (66) ai ai weile be men-i hehe niyalma de  
 何 何 事 ACC 1.PL.EXCL-i 女 人間 DAT  
 ainu fonji-mbi.  
 何故 尋ねる-IMPF.CONCL  
 「なんでもかんでも、女の私達にどうして尋ねるのですか？」  
 原漢語： 凡事不必問俺女流。 三 05:063a

この(66)は関羽の発言に対する甘夫人と糜夫人の二人の発言である。

- (67) muse-i ahūn deo ilan niyalma  
 1.PL.INCL-i 兄 弟 三 人間  
 abka-i fejergi de hetu undu yabu-me, cooha-i  
 天-i 下 DAT 横 縦 行く-IMPF.CONV 兵-i  
 erdemu be bodo-ci we de isi-rakū.  
 才 ACC 思う-COND 誰 DAT 及ぶ-IMPF.NEG  
 「我々兄弟三人は天下を馳せ巡り、武芸に関しては誰にも負けない。  
 (直訳：…武芸を考慮したなら、誰に及ばないか?)」  
 原漢語： 俺兄弟三人，縦横天下，論武藝 不如誰。 三 08:038b

<sup>58</sup> 無理に「私のおいぼれ」と訳せばこの語順で日本語でも許容できる。日本語でも NP<sub>2</sub> が一部の罵倒表現である場合は例外的に NP<sub>1</sub> を人称代名詞(人称名詞)とする語順が可能であるが、満洲語の sakda「老いた，老成した」は良い意味でも使われる語であり，(65)の例は老人が若者に対して事実を述べているようにしか見えない。NP<sub>2</sub> は(68)の様な明らかに NP<sub>1</sub> を罵倒する表現もあるが(66)の様な「女性である」という事実，(67)，(69)の様な「3人兄弟である」という事実を述べるだけの例も可能である。

この(67)の例は張飛の発言である。「我々」の属格形 *musei* も「兄弟三人」 *ahūn deo ilan niyalma* も両方とも発話者である張飛と聞き手である劉備、関羽の合計三人を指す。

- (68)     *bi*                      *enenggi*   *sin-i*   *aha*     *-i*         *baru*  
           1.SG.NOM            今日     2.SG-i   奴隸     -i         対して  
           *ete-re*                *anabu-re*                      *be*        *bolgo-mpi.*  
           勝つ-IMPF.ADN   負ける-IMPF.ADN   ACC   明確にする-IMPF.CONCL

「私は今日、奴隸(つまらない男)のお前と勝敗を決する。」

原漢語: 吾今日與匹夫須決勝負。

三 15:077a

- (69)     *suwen-i*                      *ahūn deo*                      *ilan*         *niyalma*  
           2.PL-i                      兄 弟                              三            人間  
           *gemu*    *cenghiyang*                      *be*        *ama -i*    *gese*        *weile.*  
           皆        丞相                              ACC    父 -i    如く        仕える .IMP

「おまえたち兄弟三人は皆丞相に父のように仕えなさい。」

原漢語: 爾兄弟三人皆以父事丞相。

三 17:082b

「同格の属格」という範疇は少数の言語にしか見られず、しかも定義が曖昧である。また、日本語と満洲語の両言語にも本質的に同じものが存在するとも思えない。属格形の用法としての「同格」という用語は用いずにここに示した現象を記述できるならばその方が望ましいと言える。

### 4.1.2 本稿の立場

「同格」という用語の定義の混乱を避けるために次節以降は、単に「同格」なる語は用いずに以下の通り定義された二語を用いる。

- ・ 同格の属格： 「NP<sub>1</sub> であり、かつ NP<sub>2</sub> でもあるモノ」を指す「NP<sub>1</sub> <sub>-i</sub> + NP<sub>2</sub> <sub>i</sub>」(<sub>i</sub>: 同一指示) という形で実現する構造における 属格標識-i の用法、すなわち満洲語の所謂「同格の属格」を本稿でも同じ名称で呼ぶ。
- ・ 狭義の同格： 同一指示の名詞句の単なる併置を「狭義の同格」と呼ぶ。  
cf. (63)

なおこれらは本稿の議論のための定義である。一般言語学的な用語として「同格の属格」および「狭義の同格」なる概念に対する厳密な定義を提供する目的のものではない点に注意されたい。

本稿はまず、「同格の属格」の解釈以前に、満洲語においてコピュラの連体形がゼロ(音形なし)になる場合がある事を示す(4.2.2 節)。さらに、従属節においてゼロコピュラの主語も他の動詞の主語同様属格形で現れうる事を示す(4.2.3 節)。最後に、満洲語に主要部内在型関係節がある事から、「同格の属格」は、主語用法(属格主語)であると主張する(4.3 節)。

## 4.2 属格主語とコピュラ

### 4.2.1 従来の記述

属格をとる主語について、津曲(2002: 86, 87)は(70)のように述べる。(例文は出典表記を省略し例文番号と満洲語のローマ字表記および強調表記を変更して引用する。)

(70)<sup>59</sup> 種々の従属節のうち、連体法の動詞 **-rA**, **-hA** (まれに形容詞)がそれぞれ、

- ①名詞にかかる連体修飾節をなしている場合 **【i】**,
- ②それ自身で名詞節を作っている場合 **【ii】**,
- ③名詞化接尾辞 **-ngge** をとって名詞節を作っている場合 **【iii】**,

その主語は属格をとりうる。**【中略】**

- 【i】**     **han -i takūraha elcin**  
          皇帝が遣わした使者
- 【ii】**    **irgen -i bucere be gosirakū ofi**  
          民が死ぬのを哀れまないの
- 【iii】**    **【前略】 sin-i tacihangge udu aniya oho.**  
          おまえが学んだのは何年になったか

早田輝洋(2006: 56)は「A=B を表す繫辞文は、無標的な未完了肯定終止形では通常繫辞無しであるが、それ以外の形には繫辞が必須である。」と述べる。ここで述べられている「繫辞(コピュラ)」の「無し」および「必須」とは、それぞれ、音形のあるコピュラについてそれが無い(出現しない)か、必須である(必ず出現する)かを言っている。早田輝洋(2006)の主張に基づくと満洲語の動詞 **bi-**は以下のように現れる事になる。コピュラの未完了連体形 **bisire** と完了連体形 **bihe** はゼロにならず必ず音声として発音されると言う。

---

<sup>59</sup> なお、**-ngge** を早田輝洋(2011)に従い形式名詞と考えると①と③は同じ物という事になるし、②も(基本的に主格形以外で)**-ngge** と交替しうるゼロ形式名詞を認めれば、3 つはすべて同じものとして一般化が可能である。本稿ではこのゼロ形式名詞を認めて記述を行う。

表 2 5 早田輝洋(2006)の主張に基づく満洲語の動詞 bi-

	存在動詞(無標)	存在動詞(有標)	A=B を表すコピュラ
未完了終止	bi	bimbi	Ø~bi (bi は稀である)
完了終止	bihe <sup>60</sup> ~bihebi	bihe~bihebi	bihe~bihebi
未完了連体	bisire	bisire	<u>bisire</u>
完了連体	bihe	bihe	bihe

これに対して、満洲語には(70)で述べられたような従属節のみならず、コピュラ連体形が発音されずに、表記に現れた表層形では「属格主語、名詞述語終わり」となる従属節も認めるべきであるというのが、この 4.2 節で行う主張である。主語が属格形で現れ、表層形で名詞述語で終わる従属節があるという主張は管見に入らないが、少なくとも、名詞を述語とするコピュラ文が連体節になる場合にはコピュラ bi-の未完了連体形、すなわち、上の表 2 5 の中の下線を引いた bisire は、通常はゼロになる事を示す<sup>61</sup>。

#### 4.2.2 コピュラの未完了連体形

コピュラ(繫辞)文が「無標的な未完了肯定終止形では通常繫辞無しであるが、それ以外の形には繫辞が必須である」(早田輝洋 2006: 56)ならば、名詞 B を述語とする表現 a.「(A が)B である」と b.「(A が)B であった」は、それぞれ、以下の形で現れなければならない。

- (71) a. (A (-i)) B bisire 「(A が)B である」  
 b. (A (-i)) B bihe 「(A が)B であった」

この bisire, bihe がゼロになってはならないはずである。

確かに後者は用例がある。「名詞+コピュラ完了形 bihe」は、名詞を連体修飾する形でも、主文末でも、連体節末でも用いられる。

<sup>60</sup> 前述の通り、満洲語は(現代日本語などと同様)連体形に終止用法がある。

<sup>61</sup> 形容詞の後ろにあらわれる補助動詞的な bi-をコピュラとするか存在動詞とするかという問題には本稿は立ち入らない。

(72) 連体修飾

daci hafan **bi-he** niyalma  
 元々 役人 COP-PERF.ADN 人

「元々役人だった人」

原漢語: 原任官員吏典 三 15:099b

(73) 主文末用法 ([ ]内が直接引用文で, この文を終止する位置に **bihe** がある)

[bi daci su gurun -i jiyangjiyūn **bi-he**] se-me  
 1.SG.NOM 元々 蜀国 -i 將軍 COP-PERF.ADN 言う -IMPF.CONV

「『私は元々蜀の將軍だった。』と言い…」

原漢語: 曰。我本是蜀將。 三 19:070b

(74) 連体節末 ([ ]内が連体節)

[we **bi-he**] Ø sa-rkū.  
 誰 COP-PERF.ADN FN 知る -IMPF.NEG

「誰だったのか知らない。」

原漢語: 不知何人也。 三 12:061b

問題は早田輝洋(2006: 57)でコピュラ **bi**-の未完了連体形とされる **bisire** である。『満文三国志』において動詞 **bi**-の未完了連体形 **bisire** は表 2 6 のとおり742例あるが, そのうちの名詞語幹+**bisire** 108 例は, 全て(75)の様な存在動詞「ある, いる」である。**bisire** がコピュラ「デアル」として用いられている例は見つからない。

表 2 6 『満文三国志』中の bisire, bihe<sup>62</sup>

句中における bisire/bihe の先行要素	bisire	bihe
名詞語幹＋対格（対格主語）	2	0
名詞語幹＋与格	96	47
名詞語幹＋属格（属格主語）	36	1
名詞主格形（主語）	bisire/bihe は存在動詞	
名詞主格形（述語）	bisire/bihe はコピュラ	
形容詞	23	94
副詞	27	30
動詞	443	614
なし	7	0
合計	742	1333

- (75) min-de sakda aja **bisi-re** be sa-fi.  
 1.SG-DAT 老いた母 いる-IMPF.ADN ACC 知る-PERF.CONV

「私に老母がいるのを知って…」

原漢語： 知我有老母也。

三 06:012a

本資料で名詞の後でコピュラの bisire が出ないのは偶然ではありえない。実際、「(何か)NP デアル事を識別する (taka-)」あるいは「(何か)NP デアル事を知る (sa-)」という表現において「デアル」にあたる音形のある要素は現れていない。(76)の例は最初に人の姿を見た呂布が、その人物を貂蟬だと認識する場面である。原漢語で「是」が用いられているとおりの「貂蟬である」事を「知る」節である。満洲語では diyocan「貂蟬」と対格標識 be の間に bisire は現れていない。

<sup>62</sup> この表でいう「名詞」は一般に疑問詞、代名詞とされる体言も全て(合計 10 例)含む。





- (80) ts'oots'oo -i han be gidaša-ra,  
 曹操 -i 帝 ACC 欺く -IMPF.ADN  
dergi be akū ara-ha hūlha Ø Ø be  
 上 ACC 無い する -PERF.ADN 賊 COP FN ACC  
 si sa-rkūn.  
 2.SG.NOM 知る -IMPF.NEG.Q

「曹操が帝を欺く，上を蔑ろにした賊である事をおまえは知らないのか？」

原漢語： 必識曹操欺君罔上之賊。 三 08:019a

訳文の下線部は、原漢語では「曹操」が主語で「欺君罔上之賊」が述部である。偽の手紙を読んで劉備に仕えるのをやめて曹操の所へ来た徐庶を母親が「曹操は悪人なのに何故そのような事をした」と非難する場面である。文脈を考慮すると ts'oots'oo「曹操」と hūlha「賊」が別人であるという読みは不可能である。ゼロコピュラを認めない従来の解釈に従うとこれも「同格の属格」である。しかし、徐庶はすでに曹操を知っており言葉も交わしているから、この文は「帝を欺く，上を蔑ろにする賊の曹操を，おまえは知らないのか？」だと解釈するよりも、「曹操が，帝を欺く上を蔑ろにする賊である事を，おまえは知らないのか？」だと考えた方がよい。-i は連体節におけるゼロコピュラの属格主語を表している。

- (81) bi daci sakda jiyangjiyūn -i jalan de  
 1.SG.NOM 元々 老いた 將軍 -i 時代 DAT  
unenggi haha Ø Ø be sa-ha bi-he  
 真に/の 男 COP FN ACC 知る -PERF.ADN いる -PERF.ADN

「我はもとより，老將軍が当世にて本当に男であるのを知っている。」

原漢語： 吾素知老將軍乃世之真丈夫。 三 13:052a

(81)も同様に属格主語の例であると考えられる。張飛が、この時点では敵で、以前からの知り合いではない老將軍である嚴顔に対して発言している。下線部が指しているのは「老將軍が当世にて本当に男」であるという事実である。与格形 jalan de「時代にて」は連体修飾は不可能な形式である。連体節にあって jalan de が副詞的に振る舞っていると考えれ

ばこの例文は最も自然に解釈できる。

従来の記述ではここに挙げた様な従属節の存在は認められていなかったが、「NP<sub>1</sub> が NP<sub>2</sub> である(事)」を表す「NP<sub>1</sub> -i NP<sub>2</sub> +ゼロコピュラ」(+ゼロ形式名詞<sup>65</sup>)という従属節は満洲語に存在すると考えなければならない。

### 4.3 「同格の属格」も主語用法である

次に、満洲語に頻繁に見られる、所謂「同格の属格」も属格形の主語用法である事を主張する。「NP<sub>1</sub> であり、かつ NP<sub>2</sub> でもあるモノ」を表す「NP<sub>1</sub> -i + NP<sub>2</sub>」で、NP<sub>1</sub> が叙述性の低い「定の名詞句」であるという語順は、先ほど 4.2.3 節で見た「NP<sub>1</sub> が NP<sub>2</sub> である事態」を表す連体節の語順と同じである。「同格の属格」もゼロコピュラの属格主語だと考えれば、この構造に見られる語順を説明する事ができる。

#### 4.3.1 一般的な従属節の属格主語として説明できる例

4.2 節で「NP<sub>1</sub> -i NP<sub>2</sub> +ゼロコピュラ」という従属節がある事が示された。従来の考えに従って「同格の属格」とした用例は従属節の主語であると解釈出来る。(62)の例を以下に示す。

(82)=(62)	<u>syma·joo -i</u>	<u>jalingga</u>	<u>kiyangkiyan</u>	
	司馬・昭 -i	奸な	英雄	
	ts'oots'oo ci	daba-habi.		
	曹操	ABL	超える -PERF.CONCL	
	「 <u>奸雄の司馬昭</u> は曹操を超えている。」			
別の解釈：	[[ <u>syma·joo</u> -i <u>jalingga</u> <u>kiyangkiyan</u> Ø] Ø]			
	司馬・昭	-i	奸な 英雄	COP FN
	「 <u>司馬昭が奸雄である事</u> は曹操(が奸雄である事)を超えている。」			

表記に現れた表層形で属格主語をもちながら名詞述語終わりである従属節は無いという

<sup>65</sup> 補文標識としても用いられる形式名詞(あるいは名詞化接辞)-ngge は非自立形式であり単独では発音されない。

従来の前提では上の下線部は「司馬昭であり、よこしまな英雄である」モノを表す名詞句と解釈されたが、本稿のこれまでの議論により「司馬昭が、よこしまな英雄である」という事態を指す従属節であると解釈できる。それならば、この-i は主語用法である。表記に現れた表層形において「同格の属格」の例と「NP<sub>1</sub> が NP<sub>2</sub> **である**事態」を表す属格主語の節は同じ形をしている。しかし、事態を表す節の主語用法であるというこの解釈では、「同格の属格」の用例の一部しか説明できない。「同格の属格」の用例の多くは(82)と異なり「NP<sub>1</sub> が NP<sub>2</sub> **である**事態」という解釈が明らかに不可能な文脈で用いられている例や、そのような解釈ができるか議論の余地があるものが多々存在する。

例えば、(83)は漢の大臣である王允による呂布に対する発言であるが、この発言は「王允が、既に貂蝉を呂布に与える約束していたのに董卓に与えてしまった事」を呂布が非難したのを受けて行われている。「王允が老人である事」を非難したわけではないから「將軍(呂布)は何故、私が老人である事を咎めるのだ？」と解釈する事は不可能である。

(83) = (65)	jiyangjiyūn	ai	turgun	de
	將軍	何の	理由	DAT
	<u>min-i</u>	<u>sakda</u>	<u>niyalma</u>	be
	1.SG-i	老いた	人間	ACC
				咎める-IMPF.CONCL
	「將軍は何故、 <u>老人の私</u> を咎めるのだ？」			

次の(84)の様な例も問題である。動詞 fonji-「尋ねる」の間接目的語、すなわち質問される人物は与格標識 de で表示されるから(84)の men-i hehe niyalma の部分は事態ではなくて人物を指していると考えた方が自然である。これを「NP<sub>1</sub> が NP<sub>2</sub> **である**事態」すなわち「私達が女である事」を指すと解釈すると、連体節+与格標識 de は動詞 fonji-「尋ねる」の間接目的語ではなくて、時間の限定という事になるが、この「私達」は常に「女性」なのだから「私達が女である時に質問する」という解釈は奇妙である。「私たちが女であるのに(も拘わらず)質問する」という解釈が満洲語で可能ならば事態を指す解釈でも良いのだが、連体節+与格標識 de に時間や場所に限定されない、日本語の所謂接続助詞の「のに」にあたる用法があるかは不明であり、このような例文の説明の為だけにそれを認めるのは好ましくない。

- (84) = (66)      ai ai      weile      be      men-i      hehe      niyalma      de  
 何 何      事      ACC      1.PL.EXCL-i      女      人間      DAT  
 ainu      fonji-mbi.  
 何故      尋ねる -IMPF.CONCL  
 「なんでもかんでも、女の私達にどうして尋ねるのですか？」

では、このような例(および(82)の下線部分が事態ではなくて司馬昭を指していた場合)における「同格の属格」はいかに解釈されるべきか。ここで重要なのは満洲語に「主要部内在型関係節」が存在するという事実である。

#### 4.3.2 主要部内在型関係節の属格主語として説明できる例

前述のとおり日本語では「NP<sub>1</sub>であり、かつNP<sub>2</sub>でもあるモノ」を表す名詞句「NP<sub>1</sub>の+NP<sub>2</sub>」は、NP<sub>1</sub>が人称名詞である場合(85)は、極めて許容されにくい、人称名詞「私達」が先行していても、「NP<sub>1</sub>のNP<sub>2</sub>デアルの」という「コピュラ連体形+の」が後置された形(86)であるならば、日本語でも許容度は上がる<sup>66</sup>。

- (85)      a. \*関羽将軍が、私達<sub>i</sub>の女<sub>i</sub>と相談する      cf. (84)  
           b. 関羽将軍が、女<sub>i</sub>の私達<sub>i</sub>と相談する

- (86)      関羽将軍が、[私達<sub>i</sub>の女<sub>i</sub>であるの]と相談する

これは日本語の研究において Kuroda (1974, 1975・76, 1976・77)などで広く知られるようになった「主要部内在型関係節」と呼ばれる関係節である。表層形において「私達」が[ ]でくくられた部分の意味上の主要部になっている。そして満洲語も(87)～(91)の通り、日本

<sup>66</sup> 「デアル」が書き言葉的であるのに対して、主要部内在型関係節が(少なくとも現代語では)話し言葉的であるから、主要部内在型関係節「NP<sub>1</sub>のNP<sub>2</sub>デアルの」は頻繁には見られないが、実際に用例は存在する。

該鐵道の従来輕便鐵道であるのを改築して、

(『太陽コーパス』、『太陽』1909年12月号 P070B16)

語の先ほどの関係節に類似の構造が可能な言語である事が知られている<sup>67</sup>。

- (87) [ji·ping ni boo-de gene-re Ø] be  
 吉・平 -i 家-DAT 行く -IMPF.ADN FN ACC  
 bi-bu-fi,  
 居る -CAUS-PERF.CONV  
 「[吉平が家に帰るの]をそのまま居させて…」  
 原漢語： 吉平辭去。承留住， 三 05:040a

- (88) [ts'ai·dzung. ts'ai·ho -i holto-me  
 蔡・中 蔡・和 -i 偽る -IMPF.CONV  
 daha-ha-ngge] be bi-bu-fi.  
 投降する -PERF.ADN-FN ACC 居る -CAUS-PERF.CONV  
 「[蔡中と蔡和の偽装投降したの]を(騙されたふりをして)居させておいて…」  
 原漢語： 故留蔡中蔡和詐降之人 三 10:013a

<sup>67</sup>Kubo (1985)は、満洲語の主要部内在型関係節について、主要部が関係節中の目的語であり主文中の主語である(o-S)タイプと、主要部が関係節中の主語であり主文中の主語である(s-S)タイプと主要部が関係節中の主語であり主文中の目的語である(s-O)タイプの三タイプを報告している。主要部が関係節中の目的語であり主文中の目的語であるタイプ(Kubo の書き方に従うと o-O)は報告されていないが、以下のとおり存在するので報告しておく。

- [ere nirugan niru-ha Ø] be si tuwa-me ara  
 この 絵 描く -PERF.ADN FN ACC 2.SG 見る -IMPF.CONV 作る .IMP  
 「私が描いたこの(兵器の)絵(直訳：この絵を描いたの)を汝が見て作れ。」  
 原漢語: 皆畫成圖本。汝可如法造之。 三 21:064b

- (89) [niyalma -i buce-he-ngge] bihan de  
 人 -i 死ぬ-PERF.ADN-FN 野 DAT

jalu-kabi.

満杯になる-PERF.CONCL

「[人の死んだの]が野原に満ちた。」

原漢語： 殺人遍地。

三 07:051a

- (90) meng·ioi·leo inu hangsi inenggi waliya-me  
 孟·玉·楼 もまた 清明 日 供える-IMPF.CONV  
 gene-fi, yung·fu·sy se-re miyoo de,  
 行く-PERF.CONV 永·福·寺 言う-IMPF.ADN 寺 DAT

[cūn·mei, pan·gin·liyan -i eifu de hoošan deiji-me  
 春·梅 潘·金·蓮 -i 墓 DAT 紙 焼く-IMPF.CONV  
 gene-he Ø] de ucara-bu-ha ba-be ala-fi

行く-PERF.ADN FN DAT 偶然会う-PASS-PERF.ADN 所-ACC 語る-PERF.CONV

「孟玉楼も清明節の墓参りに行って永福寺という寺で、春梅が潘金蓮の墓で紙を焼いていたのに出くわした(直訳：…[春梅が潘金蓮の墓で紙を焼いていたの]に会われた<sup>68</sup>)事を語り…」

原漢語： 玉楼又把清明節上墳在永福寺遇見春梅，在金蓮墳上燒紙的話告訴他

金 92:11b

ここまでの4例は動詞述語の例であった。次に示すのは形容詞述語の例である。満洲語の形容詞が名詞と同じく体言であって名詞によく似ている事は既に述べた。(91)の例は「同格の属格」の用例によく似ている。

<sup>68</sup> 孟玉楼が、自らが春梅に遭遇した事を述べる場面である。「NP と遭遇する」は、会う相手を直接目的語とする他動詞 ucara-「偶然会う」に由来する NP de ucara-bu-「NP に会われる」という受動の形が用いられている。

- (91) [lio·fung,                    meng·da -i            doro            akū            Ø]  
 劉・封                    孟・達            -i            道            無い            FN  
 be            wa-ha                    se-me                    ele-rakū.  
 ACC            殺す-PERF.ADN    言う-IMPF.CONV    満足する-IMPF.NEG  
 「[劉封, 孟達の礼無き]を殺したとて(私は)満足できない。」  
 原漢語： 劉封, 孟達, 如此無禮。罪不容誅。                    三 16:037a

音形のある動詞述語と形容詞述語の両方の場合において表面的に日本語の「主要部内在型関係節」に類似した従属節が有る以上、音形が無いゼロコピュラでも同様の従属節がある事は不思議な事ではない。満洲語に頻繁に見られる「定の名詞句 NP<sub>1</sub> 属格形 + NP<sub>2</sub>」タイプの「同格の属格」は、連体節の主語を表す「主格用法の属格形」の用法の一部であると考えられる。すなわち、単純な[NP<sub>1</sub> 属格形 + NP<sub>2</sub>]ではなくて、以下の通り[[NP<sub>1</sub> 属格形 + NP<sub>2</sub> + コピュラ Ø]形式名詞 Ø]という構造をしていると考えられる。

- (92) = (65)            jiyangjiyūn ai turgun de min-i sakda niyalma be wakalambi.

原文に近い訳： 「将軍は何故, 私の老人であるのを咎めるのだ？」

下線部の構造は以下の通りである。

[[min-i sakda niyalma Ø]            Ø]            be  
 1.SG-i    老いた    人間            COP            FN            ACC

- (93) = (66)            ai ai weile be men-i hehe niyalma de ainu fonjimbi.

原文に近い訳： 「なんでもかんでも, 私達の女であるの, に<sup>69</sup> どうして尋ねるのですか？」

下線部の構造は以下の通りである。

[[men-i hehe niyalma Ø]            Ø]            de  
 1.PL.EXCL-i    女            人間            COP            FN            DAT

<sup>69</sup> 接続助詞の「のに」ではない点に注意されたい。

このように解釈する事により，満洲語の「同格の属格」に対して合理的な説明を行う事ができる。

#### 4.4 小括

満洲語における「同格」の属格の問題について，本章では以下の三点を示した。

- ①早田輝洋(2006)の記述に反して，コピュラの未完了連体形は，少なくとも名詞述語の後ではゼロ（音形なし）になる。
- ②従属節において，①のゼロコピュラの主語は他の発音される動詞の主語同様に属格形で現れうる。すなわち，津曲(2002)の記述にある属格主語のみならず，表記に現れた表層形において名詞句終わりの節の主語も属格形で現れうる。
- ③上の2点に基づくと，満洲語の「同格の属格」という現象も「NP<sub>1</sub>-i + NP<sub>2</sub>」を発音されないコピュラで終わる従属節(主要部内在型関係節を含む)であると考えれば，第一名詞句が定である語順でも決して奇妙ではない。日本語では許容されない「私達<sub>i</sub>の女<sub>i</sub>」(<sub>i</sub>: 同一指示)のように見える *men-i hehe niyalma* (「私達」属格形+女)という表現は，[[*men-i hehe niyalma* Ø]Ø]「[私たちが女である](の)」という主要部内在型関係節を用いた表現である。

満洲語の格標識-i による「同格の属格」は連体節の主語用法の一つに過ぎないと考えられる。具格用法を除く-i の機能は「連体修飾標識，および連体節の主語の標識」であると言える。

## 第5章 -iに続く[数詞+nofi「人」]について

本章では第4章の考えに従うと連体節の属格主語である所謂「同格の属格」だと解釈されるもののうち、(94)、(95)のような nofi「(三人の)～人」という語で終わる構造について考察する。

(94)=(61)

dobori	dari	kemuni	<u>li·fung</u>	<u>jang·ji</u>	<u>hiya·heo·hiowan</u>	<b>-i</b>
夜	ごと	ずっと	李・豊	張・緝	夏・侯・玄	-i
<u>ilan</u>	<b>nofi</b>	ergen	be	tooda-me	gaji	
三	人	命	ACC	返す-IMPF.CONV	くれ	
se-me		jide-re	be	sa-bu-mbi.		
言う-IMPF.CONV		来る-IMPF.ADN	ACC	見る-CAUS-IMPF.CONCL		

「毎晩ずっと李豊，張緝，夏侯玄の三人が

命を返してくれと言いに来るのが目に映る。」

原漢語： 毎夜只見李豊，張緝，夏侯玄，三人索命。 三 22:077a

(95) suwen-i ilan **nofi** ainu tuta-ha.  
2.PL-i 三 人 何故 遅れる-PERF.ADN

「お前たち三人(直訳:お前たちの三人)は何故遅れたのだ。」

原漢語： 汝三人何故出遅。 三 22:063b

あらかじめ断っておくが、本章で述べるのはあくまでも第4章で示した解釈による「同格の属格」とは別の構造のものが存在する可能性に過ぎない。決して、上に示した例を第4章の考えに従って解釈する事に対する明らかな反例を提示するもまでには至っていない点に注意されたい。

### 5.1 共時態における nofi の特殊性

nofi は『満文三国志』中に 515 例と用例がかなり多い語である。全て直前に数詞<sup>70</sup>を伴う。この数詞は(94)と(95)の例で見た様な、談話からどの個人であるかが特定できる集団の人数を述べている事もあるし、以下(96)、(97)の様にそれが不特定である事もある。(97)の様に udu nofi「幾人」を用いて人数を尋ねる事も可能である。

- (96) takūrša-ra hehesi emu udu nofi gai-fi  
 使う-IMPF.ADN 女.PL 一 幾ら 人 取る(連れる)-PERF.CONV  
 tuta-fi nure omi-bu-re de.  
 遅れる-PERF.CONV 酒 飲む-CAUS-IMPF.ADN DAT  
 「侍女数人を連れて残って酒を飲ませた時に…」  
 原漢語：只留侍妾數人勸酒。 三 02:046b

- (97) cimari udu nofi ji-kini  
 明日 幾ら 人 来る-OPT  
 「明日、何人来れば良いでしょうか？」  
 原漢語：請問爹明日叫幾名答應， 金 73:10a

第 4 章で示した所謂「同格の属格」の解釈を適用すると、先ほどの(94)の下線部は(98)、(95)の下線部は(99)のような連体節であると解釈される事になる。

- (98) [[ li·fung jang·ji hiya·heo·hiowan -i ilan **nofi** Ø] Ø]  
 李·豊 張·緝 夏·侯·玄 -i 三 人 COP FN  
 「李豊，張緝，夏侯玄の三人であるの」

<sup>70</sup> 本章の議論では、概数表現にも、数量を問う疑問詞にも用いられる udu「幾ら」や、～ funceme, ～ funcere「～あまり」などの概数表現をも数詞として扱う。

- (99) [[ suwen-i ilan nofi Ø] Ø]  
           2.PL-i 三 人 COP FN  
           「お前たちの三人であるの」

このような節を主要部内在型関係節であると解釈した方がよいか否かは文脈次第であるが、いずれにせよ、この二人称複数の代名詞 *suwen-i* は *ilan nofi* を述語とするコピュラ節における属格主語であると解釈される。

ある名詞(句)をコピュラ文の名詞述語とする連体節があるならば、その名詞(句)は主文等、「同格の属格」節以外のコピュラ文でも名詞述語として用いる事が可能であると考えられる。以下に具体的に例を示す。

- (100) bi ainu sin-i emhun haha de gele-mbi.  
           1.SG.NOM 何故 2.SG-i 独りぼっち 男 DAT 恐れを抱く -IMPF.CONCL  
           「私がどうして、匹夫のお前を恐れるだろうか？」  
           原漢語：孤何懼尔一匹夫耶。 三 18:005a

この例文(100)の下線部は、連体節による以下の構造をしていると考えられる。

- (101) [[ sin-i emhun haha Ø] Ø]  
           2.SG-i 独りぼっち 男 COP FN  
           「お前の独りぼっちの男であるの」

この解釈は名詞句 *emhun haha* を用いた「○○が独りぼっちの男である」という文が可能である事が前提になる。そして実際に、*emhun haha* を用いて「独りぼっちの男である」事を述べる明らかなコピュラ文は以下の例に示す通りに存在する。

(102) ts'oo·žin emhun haha.<sup>71</sup>

曹・仁 独りぼっち 男

「曹仁は匹夫の男だ。」

原漢語：曹仁匹夫。

三 11:016a

前の章で見た以下(103)の例についても(104)のとおりに名詞句 *hehe niyalma*「女」が「同格の属格」節以外でコピュラ文の述語になっている例を挙げる事が出来る。

(103) = (66)

ai ai weile be men-i hehe niyalma de  
 何 何 事 ACC 1.PL.EXCL-i 女 人間 DAT  
 ainu fonji-mbi.

何故 尋ねる-IMPF.CONCL

「なんでもかんでも、女の私達にどうして尋ねるのですか？」

原漢語：凡事不必問俺女流。

三 05:063a

(104) si hehe niyalma bi-me

2.SG.NOM 女 人間 COP-IMPF.CONV

hono doro sa-mbi.

なお 道 知る-IMPF.CONCL

「汝は女でありながら尚礼を知る。」

原漢語：汝乃婦人，尚自知禮。

三 12:042a

ところが、*nofi* という語は使用頻度の高い語でありながら「○○は *x* 人である。」というコピュラ文の述語になっている例が見つかっていない<sup>72</sup>。「○○は *x* 人である。」という場合は(105)の例に見る[数詞+ *niyalma*] (*niyalma* は「人間」を表す普通名詞である)や、(106)

<sup>71</sup>4.2 節の表 2 5 でも述べられているとおり，コピュラ終止形の *bi* は稀にしか現れない。

<sup>72</sup>18 世紀の『満文老檔』に例が無いという御指摘を久保智之氏より頂いた。筆者が見る限り『満文原檔』でも同様である。本章の議論は，この御指摘をうけて行われたものである。



表 2 7 『満文三国志』 nofi の全用例(直前の数詞による内訳)

用例	度数
emu udu nofi 「数人」 一 幾ら 人	1
juwe nofi 「二人」 二 人	422
juwenofi <sup>73</sup> 「二人」 二人	3
ilan nofi 「三人」 三 人	58
duin nofi 「四人」 四 人	26
sunja nofi 「五人」 五 人	4
ninggun nofi 「六人」 六 人	1
合計	515

<sup>73</sup>422 例ある juwe nofi のように数詞と nofi は分けて書かれるのが普通であるが、juwenofi と続けて書かれている例が 2 例存在する。このように nofi を接尾辞のように前の語に続けて書く表記は無圏点満洲文字資料ではより頻繁に見られる。

基本数詞のみによる単純な表現に限って **nofi** と **niyalma** の用例を比較すると以下のとおりである。

表 2 8 [基本数詞 + **nofi**]と[基本数詞 + **niyalma**]の分布<sup>74</sup>

	emu 「一」	juwe 「二」	ilan 「三」	duin 「四」	sunja 「五」	ninggun 「六」	nadan 「七」	jakūn 「八」	uyun 「九」	juwan 「十」	十一～ 一億	合 計
<b>nofi</b>		425	58	26	4	1						514
<b>niyalma</b>	435	118	23	17	5	2	7	4		3	98	712
合計	435	543	81	43	9	3	7	4	0	3	98	

(107)の例は、人数を尋ねるコピュラ疑問文であるが、話者が人数を把握していないとは言え、城を守備している人間が数人しかいないという回答は恐らく想定していないであろう。(逆に『満文金瓶梅』の(97)の例は、**nofi** を用いて人数を尋ねているが、翌日に必要な調理師の人数を尋ねている。恐らく極端に多い人数は想定されていないと思われる。この後に続く返答は「調理師 6 人、給仕 2 人」である。)『満文三国志』のみを一共時態として見る限りでは、資料中に「○○は[数詞 + **nofi**]である。」というコピュラ文の例が無いのはそのような文が不可能であるからではなく、可能ではあるのだが偶然資料中に用例が出ていないだけである可能性は十分に高い。

『満文三国志』(1650 年序)よりも成立時期が後の『満文金瓶梅』(1708 年序)には以下(108)のとおりコピュラの述語で述べられる人数が二人の例がある。『満文金瓶梅』でも **nofi** という語は「○○は x 人である。」というコピュラ文の述語になっている例は無い<sup>75</sup>。

<sup>74</sup> jakūn uyun niyalma「八、九人」のような概数表現は除いた。

<sup>75</sup> ただし **nofi** と属格に関わる現象がすべて『満文三国志』と『満文金瓶梅』で同様に見られるわけではない。『満文三国志』では[NP<sub>i</sub>属格形 + 数詞 **nofi**]の後に属格標識の -i が現れた例は無いが、『満文金瓶梅』では 3 例存在する。成立時期が異なるこの二つの資料で **nofi** の用法に時代差がある可能性ももちろん否定できない。

- (108) te        ere        boo-de    tere-i    ufuhu    niyaman -i        siren -i    gese  
 今        この        家-DAT    あれ-i    肺        心臓 -i        脈 -i        如く  
 urhu-fi                    gosi-re-ngge                    damu    juwe    niyalma.  
 偏る -PERF.CONV    思う -IMPF.ADN.FN                    只        二        人間  
 「今、この家で、あの人が心の底から偏愛しているのはただ二人だ。」  
 原漢語：家中，他心肝肱蒂兒偏歡喜的只兩個人，                    金 35:18a

次の表 2 9 に示すとおり、『満文金瓶梅』でも『満文三国志』同様に「二人」を表すのに *juwe nofi* という表現は盛んに用いられているのだが、(108)の例では *nofi* ではなく *niyalma* が用いられている。『満文金瓶梅』で「二人」を表す際の *nofi* と *niyalma* の度数を単純に比較すると *juwe nofi* は 767 例も用いられているのに対して *juwe niyalma* は 130 例 (*juwe nofi* と *juwe niyalma* の度数の合計の 14 %) である。[数詞 + *nofi*] が *niyalma* 同様に一般的にコピュラ文の述語に用いられるのであるならば(108)の例は *niyalma* ではなく「二人」を表す際により一般的な *nofi* が用いられやすい文脈であったと思われる。

表 2 9 『満文金瓶梅』 nofi の全用例(直前の数詞による内訳)

用例	度数
udu nofi 幾ら 人	「幾人」 4
juwe nofi 二 人	「二人」 767
ilan nofi 三 人	「三人」 88
ilan duin nofi 三 四 人	「三, 四人」 3
duin nofi 四 人	「四人」 44
sunja nofi 五 人	「五人」 4
ninggun nofi 六 人	「六人」 1
nadan jakūn nofi 七 八 人	「七, 八人」 1
合計	912

従って、(108)で nofi が用いられていないのが、[数詞 + nofi]のコピュラ文における述語用法が不可能である事、あるいは[数詞 + nofi]のコピュラ文における述語用法が一般的には用いられない事が原因である可能性も無視できない。もちろん、juwe nofi + juwe niyalma の 14% という juwe niyalma の度数は偶然 niyalma が用いられた可能性を退けて結論を出すには程遠い高い割合であるから、あくまでも可能性の話である。(108)の様な nofi が使えそうな少ない「x 人」を名詞述語にとる例が資料中に一例しか見つからない以上、当時の満洲語において此处で nofi と niyalma がどちらも使用可能である可能性は残る。

[数詞 + nofi]の述語用法が不可能であるならば[NP<sub>1</sub>属格形 + [数詞 + nofi]]を(99)のように解釈する事は不可能である。[NP<sub>1</sub>属格形 + [数詞 + nofi]]は十七世紀の共時態におい

て第4章であつかった「同格の属格」とは異なる特殊な表現になっており、関係節ではない単純な構造になっていた可能性も考えられる。nofi は用いられる用例が極端に限られており、かつよく使われる語であるから、日本語の「〇〇の馬鹿」の「の」のように一般的な「同格の属格」とは異なる例外であるのかもしれない。

## 5.2 通時的視点

最初の満洲語辞典(満漢辞典)である『大清全書』(1683年序)には、以下の罵倒表現が掲載されている。

(109)	hasan	nofi	
	疥癬やハンセン病等の病気	人	
	「hasan 病み」		
	罵人膿胞的		『大清全書』4巻 18a

仮に、[NP<sub>i</sub>属格形+[数詞+nofi]]は17世紀の共時態において第4章であつかった所謂「同格の属格」とは異なる特殊な表現になっていたとしても、nofi が元々は助数詞ではなくて人を表す普通名詞であつた可能性は高い。通時的にはNP<sub>i</sub>属格形+[数詞+nofi]のNP<sub>i</sub>は属格主語に由来していた可能性がある。

### 5.3 小括

本章では第4章の考えに従うと連体節の属格主語である所謂「同格の属格」だと解釈されるもののうち nofi「～人(にん)」という語で終わる構造について考察し、第4章で示した解釈による所謂「同格の属格」とは別の構造のものが存在する可能性について述べた。

nofi は用例がかなり多い語であるが。直前に一より大きな一桁の数詞を伴う極く限られた用例で多用されている。本章では「○○は  $x$  人である。」という明らかなコピュラ文における述語として[数詞+ nofi]という構造が出現した例が全く見つからない事を述べた。[数詞+ nofi]のコピュラ文における述語用法が不可能である可能性が考えられる。その場合、[NP<sub>i</sub>属格形+[数詞+ nofi]]は連体節ではあり得ない。十七世紀の共時態において第4章であつかった「同格の属格」の解釈の例外が存在する可能性がある。

ただし、nofi「～人(にん)」という語で終わる例を第4章の考えに従って解釈する事に対する明らかな反例は見つかっておらず、[数詞+ nofi]がコピュラ文における述語として使えない事を示すのには十分な用例が得られてはいない。本章では可能性を提示したに過ぎない。この問題に結論を出すには nofi についてのさらなる研究を俟たねばならない。

表 3 0 『満文三国志』 niyalma のうち数量表現であるものの全用例 922 例

(直前の数詞による内訳)

用例		度数
udu niyalma	「数人」, 「(疑問文で)何人」	14
幾ら 人間		
ududu niyalma	「幾々人」	4
幾々 人間		
emu udu niyalma	「数人」	15
一 幾ら 人間		
emhun niyalma	「独り」	1
一つだけ 人		
emu niyalma	「一人」	435
一 人間		
emu-te niyalma	「一人ずつ」	1
一-ずつ 人間		
emu juwe niyalma	「一, 二人」	2
一 二 人間		
juwe niyalma	「二人」	118
二 人間		
ilan niyalma	「三人」	23
三 人間		
ilan duin niyalma	「三, 四人」	2
三 四 人間		
duin niyalma	「四人」	17
四 人間		
sunja niyalma	「五人」	5
五 人間		
sunja ninggun niyalma	「五, 六人」	3
五 六 人間		
ninggun niyalma	「六人」	2
六 人間		

ninggun nadan niyalma 六 七 人間	「六, 七人」	1
nadan niyalma 七 人間	「七人」	7
jakūn niyalma 八 人間	「八人」	4
jakūn uyun niyalma 八 九 人間	「八, 九人」	1
juwan isime niyalma 十 程度 人間	「十人程度」	5
juwan isire niyalma 十 程度 人間	「十人程度」	4
emu juwan isime niyalma 一 十 程度 人間	「十人程度」	1
emu juwan isire niyalma 一 十 程度 人間	「十人程度」	1
emu udu juwan niyalma 一 幾ら 十 人間	「十数人」, 「数十人」(ともに 2 例)	4
udu juwan niyalma 幾ら 十 人間	「数十人」(一例だけ「十数人」)	15
ududu juwan niyalma 幾々 十 人間	「幾々十人」	3
juwan niyalma 十 人間	「十人」	3
juwan-ta niyalma 十-ずつ 人間	「十人ずつ」	1
juwan funceme niyalma 十 あまり 人間	「十人あまり」	11
juwan funcere niyalma 十 あまり 人間	「十人あまり」	4
emu juwan funceme niyalma 一 十 あまり 人間	「十人あまり」	1

juwan ilan niyalma 十 三 人間	「十三人」	3
orin niyalma 二十 人間	「二十人」	9
ori-ta niyalma 二十-ずつ 人間	「二十人ずつ」	1
orin funceme niyalma 二十 あまり 人間	「二十人あまり」	6
orin funcere niyalma 二十 あまり 人間	「二十人あまり」	4
orin duin niyalma 二十 四 人間	「二十四人」	5
orin dui-te niyalma 二十 四-ずつ 人間	「二十四人ずつ」	1
gūsin niyalma 三十 人間	「三十人」	4
gūsi-ta niyalma 三十-ずつ 人間	「三十人ずつ」	1
gūsin funceme niyalma 三十 あまり 人間	「三十人あまり」	4
gūsin funcere niyalma 三十 あまり 人間	「三十人あまり」	2
gūsin ninggun niyalma 三十 あまり 人間	「三十六人」	1
dehi funceme niyalma 四十 あまり 人間	「四十人あまり」	1
dehi funcere niyalma 四十 あまり 人間	「四十人あまり」	1
dehi uyun niyalma 四十 九 人間	「四十九人」	3
nadan nadan dehi uyun niyalma 七 七 四十 九 人間	「七七, 四十九人」	1

susai niyalma	「五十人」	6
五十 人間		
susai-ta niyalma	「五十人ずつ」	2
五十-ずつ 人間		
susai isime niyalma	「五十人程度」	1
五十 程度 人間		
susai ninju isime niyalma	「五十, 六十人程度」	1
五十 六十 程度 人間		
ninju funceme niyalma	「六十人あまり」	1
六十 あまり 人間		
nadanju funcere niyalma	「七十人あまり」	2
七十 あまり 人間		
udu tanggū niyalma	「数百人」	13
幾ら 百 人間		
ududu tanggū niyalma	「幾々百人」	9
幾々 百 人間		
emu udu tanggū niyalma	「数百人」	3
一 幾ら 百 人間		
tanggū niyalma	「百人」	4
百 人間		
emu tanggū niyalma	「百人」	2
一 百 人間		
tanggū funceme niyalma	「百人あまり」	8
百 あまり 人間		
tanggū funcere niyalma	「百人あまり」	5
百 あまり 人間		
emu tanggū funceme niyalma	「百人あまり」	1
一 百 あまり 人間		
emu tanggū funcere niyalma	「百人あまり」	1
一 百 あまり 人間		
tanggū isime niyalma	「百人程度」	2
百 程度 人間		

tanggū isire niyalma	「百人程度」	2
百 程度 人間		
tanggū-ta isire niyalma	「百人程度ずつ」	1
百-ずつ 程度 人間		
emu tanggū orin niyalma	「百二十人」	2
一 百 20 人間		
juwe tanggū niyalma	「二百人」	4
二 百 人間		
juwe tanggū funceme niyalma	「二百人あまり」	2
二 百 あまり 人間		
juwe tanggū funcere niyalma	「二百人あまり」	1
二 百 あまり 人間		
ilan tanggū niyalma	「三百人」	2
三 百 人間		
ilan tanggū funceme niyalma	「三百人あまり」	3
三 百 あまり 人間		
duin tanggū niyalma	「四百人」	1
四 百 人間		
sunja tanggū niyalma	「五百人」	8
五 百 人間		
sunja tanggū funcere niyalma	「五百人あまり」	3
五 百 あまり 人間		
jakūn tanggū niyalma	「八百人」	2
八 百 人間		
jakūn tanggū funcere niyalma	「八百人あまり」	1
八 百 あまり 人間		
minggan funceme niyalma	「千人あまり」	5
千 あまり 人間		
minggan funcere niyalma	「千人あまり」	3
千 あまり 人間		
minggan isime niyalma	「千人程度」	2
千 程度 人間		

minggan isire niyalma	「千人程度」	1
千 程度 人間		
emu minggan isire niyalma	「千人程度」	1
一 千 程度 人間		
emu udu minggan niyalma	「数千人」	2
一 幾ら 千 人間		
ududu minggan niyalma	「幾々千人」	1
幾々 千 人間		
minggan niyalma	「千人」	2
千 人間		
emu minggan niyalma	「千人」	4
一 千 人間		
emu minggan funceme niyalma	「千人あまり」	1
一 千 あまり 人間		
emu minggan funcere niyalma	「千人あまり」	1
一 千 あまり 人間		
juwe minggan niyalma	「二千人」	1
二 千 人間		
juwe minggan funceme niyalma	「二千人あまり」	3
二 千 あまり 人間		
ilan minggan niyalma	「三千人」	1
三 千 人間		
ilan minggan isire niyalma	「三千人程度」	1
三 千 程度 人間		
duin sunja minggan niyalma	「四, 五千人」	1
四 五 千 人間		
sunja minggan niyalma	「五千人」	2
五 千 人間		
sunja minggan funceme niyalma	「五千人あまり」	1
五 千 あまり		
udu tumen niyalma	「数万人」	3
幾ら 万 人間		

ududu tumen niyalma 幾々 万 人間	「幾々万人」	2
tumen niyalma 万 人間	「一万人」	24
emu tumen niyalma 一 万 人間	「一万人」	1
tumen funceme niyalma 万 あまり 人間	「一万人あまり」	1
tumen funcere niyalma 万 あまり 人間	「一万人あまり」	1
ilan tumen niyalma 三 万 人間	「三万人」	3
sunja tumen niyalma 五 万 人間	「五万人」	1
orin tumen funceme niyalma 二十 万 あまり 人間	「二十万人あまり」	1
gūsin tumen niyalma 三十 万 人間	「三十万人」	2
ududu tanggū tumen niyalma 幾々 百 万 人間	「幾々百万人」	1
tumen tumen niyalma 万 万 人間	「一億人」, 「万々人」	1
合計		922

## 第6章 結論

本稿では満洲語の格標識-i について、属格とされるものを中心に様々な角度から検証を行った。属格の-i の機能のうち今日まで満洲語学であまり注目されなかった幾つかの問題を扱い、属格の-i の機能を浮き彫りにしていく事を試みた。

第1章では満洲語が如何なる言語であるかを確認し、分析する格標識と資料について重要事項を説明した。

第2章では格標識-i の形態と綴りの上での二つの問題を考察した。まず、-i が ng で終わる語の後では ni と綴られる事に関して、単なる正書法上の工夫ではなく、当時の音声言語で起きていた現象を反映した綴りであると考えられる事、ただし、完全な異形態とも言い切れない事を指摘した。次に、格標識-i が語幹から離して書かれる「分かち書き」の有無について分析した。具格標識が属格標識に比べて顕著に分かち書きされると言えるほどの傾向の差は見られない事を示した。属格標識と具格標識を分ける根拠は音形ではなく、-i が後続した名詞(句)の、他の語句との関係そのものであると結論づけた。

第3章では格標識-i の用法のうち一部のものが『満文三国志』の後半部分で減少している事を示し、一部の表現における-i の使用において話者による差がかなりあると思われる事を述べた。特に動詞未完了連体形において、『満文三国志』の中で-i の分布が偏っている事と、この環境に関しては『満文三国志』の後半部分の-i の不使用という状況が後の『満文金瓶梅』でも継続しているという事実は、一部の用法における-i の減少という時代差を強く示唆するものである。

第4章では「属格主語」や「コピュラが音形を持たない場合」について、従来の記述が不十分な点を指摘した上で、「同格」を表すとされている属格標識-i が、無音のコピュラで終わる従属節の「主語」を表すものであるという解釈を示した。

第5章では第4章の考えに従うと連体節の属格主語である「同格の属格」だと解釈されるもののうち nofi「～人(にん)」という語で終わる構造について考察し、例外的に第4章で示した解釈による「同格の属格」とは別の構造のものが存在する可能性について述べた。

満洲語において、-i 以外に生産性の高い(音形のある標識を用いた)連体修飾手段が欠けている事や、コピュラの未完了連体形が音形無しになる事などが原因で-i は表面的に多機能

に見えているが、(具格を別にした場合の)属格標識としての-iの本質は他のアルタイ諸言語の属格標識とあまり変わらないのかもしれない。一見して類似した現象の有無のみに注目しただけの対照研究には留まらない今後の研究が俟たれるものである。

具格の-iが属格の-iと同じ形をしている問題に関しては今回、何らかの結論を出すには至っていないが、一般的な属格と別の「同格の属格」を認める必要が無い以上、属格の-iと具格の-iの機能を「句と句を繋ぐ形態素」等と極端な一般化をして一つ機能の形態素として記述する妥当性は薄れたと言える。

具格の-iと属格の-iの共時的、通時的な関係の詳細な考察は今後の課題である。満洲語における属格標識、具格標識以外の機能形態素の(有無を含む)特徴を踏まえたさらなる研究が必要である。

## 語彙集

本稿の例文または説明文中に現れる満洲語(漢語固有名詞含む)の単語と一部の形態素を、  
利便のために掲載する。ここに掲載する意味、機能は本稿で用いられているものを中心に  
載せるものであり、決して網羅的ではない。

### 【a】

abka	「天」	
abka-i fejergi	「天下」	
adali	「如し」, 「同じ」	
afanji-	「攻めて来る」	命令形 afanju
afanju	「攻めて来い」	afanji-の命令形
aga	「雨」	
aga-	「雨が降る」	
aha	「奴隸」	
ahūn	「兄」	
ahūn deo	「兄弟」	
ai	「何」	
aihūma	「くそったれ, 鼈野郎」	
ainu	「何故」	
aisila-	「支援する」	
aisin	「金(金属)」	
aja	「母」	
ajige	「小さい」	
akū	「無い」	
ala-	「語る」, 「告げる」	
ali-	「受け取る」	
ama	「父」	

anabu-	「負ける」
aniya	「年」
ara-	「作る」
arga	「計略」

## 【b】

ba	「場所」
baksan	「集団」
banji-	「生じる」, 「生きる」
baru	「へ向かって」
baturu	「勇敢(な者)」
be	対格標識
bedere-	「戻る」
beye	「身」, 「自分」
bi	人称代名詞 1 人称単数
bi-	コピュラ「である」 / 存在動詞「ある」, 「いる」
bihan	「野」
bithe	「本」, 「書物」, 「書いたもの」
bodo-	「思う」, 「考える」
bolgo-	「明確にする」
boo	「家」, 「部屋」
bu-	「与える」
-bu-	使役 / 受け身
buce-	「死ぬ」
burla-	「逃げる」

## 【c】

cala	「彼方」, 「むこう」
cala-	「失敗する」
canggi	「だけ」
ceng・du	「成都」地名
cenghiyang	「丞相」
ci	奪格標識
-ci	条件
ciha	「勝手」, 「好み」
cimari	「明日」
cing・jeo	「青州」地名
cooha	「兵」, 「軍」
cuwan	「船」
cūn・mei	「春梅」『金瓶梅』の登場人物

## 【d】

da-	「関与する」
daba-	「超える」
daci	「もともと」
daha-	「従う」
dahame	「～なので」 daha- 「従う」の未完了連用形に由来
damu	「只」
dari	「毎」
de	与格標識

dehi	「四十」	
deiji-	「燃やす」	
dekde-	「興る」, 「昇る」	
deo	「弟」	
dergi	「東」, 「上」	
deri	沿格標識	
deye-	「飛ぶ」	
diyocan	「貂蟬」『三国志演義』の登場人物	
dobori	「夜」	
donji-	「聞く」	
doro	「道」, 「礼」	
doron	「印璽」	
dosina-	「入っていく」	
dosinji-	「入って来る」	命令形 dosinju
dosinju	「入って来い」	dosinji-の命令形
duin	「四」	
dui-te	「四ずつ」派生語尾が後続した場合語末の n は多くの場合脱落する。	
dung	「洞」	
dung・dzo / dungdzo	「董卓」『三国志演義』の登場人物	
duri-	「奪う」	

## 【e】

ebsihe	「限り」
ebše-	「慌てる」
eifu	「墓」
elcin	「使者」

ele-	「満足する」
emgi	「共に」
emhun	「独りぼっち」, 「単独」
emu	「一」
enenggi	「今日」
eniye	「母」
erdemu	「才」
ere	「これ」, 「この」, 文脈次第ではフィラーの可能性あり
ergen	「命」
ergi	「方向」, 「側面」
erin	「時」
esi	「当然」
ete-	「勝つ」

## 【f】

faida-	「並ぶ」
fan・ceng	「樊城」
fan・ciyang	「范疆」『三国志演義』の登場人物
fejergi	「下」
-fi	完了連用
fon	「時」
fonji-	「尋ねる」
funce-	「余る」
funceme	「～あまり」 funce- 「余る」の未完了連用形に由来
funcere	「～あまり」 funce- 「余る」の未完了連体形に由来
funiyagan	「度量」
fusihūn	「下」

futa 「ロープ」

## 【g】

gai- 「取る」 命令形 gaisu

gaisu 「取れ」 gai-の命令形

gaji 「欲しい」, 「よこせ」, gaji- 「持って来る」と異なり, 相手の移動までは命じない。『満文三国志』では領土の要求にも用いられている。

gaji- 「持って来る」 命令形 gajio, gaju

gajio 「持って来い」 gaji-の命令形

gaju (同上)

gargan 「枝」

garhan (同上)

gele- 「～(与格)に恐れを抱く」

gemu 「みな」

gene- 「行く」

genggiyen 「明るい」

gese 「如し」, 「同じ」

gida 「槍」

gidaša- 「欺く」

giyan 「理」

goro 「遠い」

gosi- 「思う」, 「愛する」

gu 「玉」

gubci 「全体」

gui・yang 「桂陽」地名

gung 「公」

gurun	「国」
guwan・gung	「関公」『三国志演義』の登場人物
guwan・ping	「関平」『三国志演義』の登場人物
guwebu-	「許す」
gūsin	「三十」
gūsi-ta	「三十-ずつ」派生語尾が後続した場合語末の n は多くの場合脱落する。

## 【g'】

g'ang	「鋼」
g'ao・ding	「高定」『三国志演義』の登場人物
g'ao・ling	「高陵」地名

## 【h】

-ha	完了連体	母音調和によって-ha/-he/-ho と母音が変わる
-habi	完了終止	母音調和によって-habi/-hebi/-hobi と母音が変わ化する
hafan	「役人」	
haha	「男」	
-hakū	完了否定	母音調和によって-hakū/-hekū/-hokū と母音が変わ化する
hala	「姓」	
han	「帝」	
hangsi	「清明節」	

hasan	「疥癬」, 「ハンセン病」等の病気
-he	完了連体            -ha 参照
heb (e) de-	「相談する」
heb (e) še-	「相談する」『大清全書』などの記述によれば「互いに相談する」のはずだが heb (e) de- 「相談する」と差は見られない。
hecen	「城」
hehe	「女」
hehesi	hehe の複数形
hetu	「横」
hiowande	「玄德」『三国志演義』の登場人物
hiya・heo・hiowan	「夏侯淵」『三国志演義』の登場人物
-ho	完了連体            -ha 参照
holto-	「偽る」
hono	「なお」
hoošan	「紙」
hūlha	「賊」
hūwang・dzung	「黄忠」『三国志演義』の登場人物

## 【i】

i	人称代名詞三人称単数	
-i	属格標識／具格標識	
ihan	「牛」	
ilan	「三」	
ilgabun	「区別」	
in-	人称代名詞三人称単数斜格語幹	主格形 i
inenggi	「日(暦)」	

inu	「もまた」
ioi・k'ang	「餘杭」地名
irgen	「民」
isi-	「至る」
isime	「程度」isi-「至る」の未完了連用形に由来
isinji-	「到着する」
isire	「程度」isi-「至る」の未完了連体形に由来

## 【j】

jakūn	「八」
jalan	「節（ふし）」、「時代」、「世代」
jalin	「ために」
jalingga	「奸な」
jalu-	「満ちる」
jangda	「張達」『三国志演義』の登場人物
jang・fei	「張飛」『三国志演義』の登場人物
jang・ji	「張緝」『三国志演義』の登場人物
jang・sung	「張松」『三国志演義』の登場人物
ji-	「来る」
jide-re	ji-「来る」の未完了連体形
jiha	「錢（ぜに）」、「お金」
jili	「怒り」
jing・jeo	「荊州」地名
jing・šang	「荊陝」地名
jio	ji-「来る」の命令形
ji・ping	「吉平」『三国志演義』の登場人物
jiyangjiyūn	「將軍」

jiyang·wei	「姜維」『三国志演義』の登場人物
jobo-	「苦しむ」
joo·dzy·lung (joo·dz·lung)	「趙子竜」『三国志演義』の登場人物
joo·yūn	「趙雲」『三国志演義』の登場人物
jugūn	「道」
jug'oliyang	「諸葛亮」『三国志演義』の登場人物
jui	「子」
juwan	「十」
juwe	「二」
juwenofi	「二人」 juwe nofi が続けて書かれたもの

## 【k】

-kabi	-habi に同じ，一群の動詞の語尾において h は k で実現する。
kai	「だぞ」
karca-	「ぶつかる」
-ke	-ha に同じ，一群の動詞の語尾において h は k で実現する。
kemuni	「まだそのまま」，「いつも」，「なお」
-kini	希求
kiyangkiyan	「英雄」
komso	「少ない」
kungming	「孔明」『三国志演義』の登場人物

## 【l】

li·fun	「李豊」『三国志演義』の登場人物
liobei	「劉備」『三国志演義』の登場人物

lio・fung	「劉封」『三国志演義』の登場人物
lio・hūi	「劉恢」『三国志演義』の登場人物
lioi・bu	「呂布」『三国志演義』の登場人物
lioi・kuwang	「呂曠」『三国志演義』の登場人物
lioi・meng	「呂蒙」『三国志演義』の登場人物
li・žu	「李儒」『三国志演義』の登場人物
loho	「刀」

## 【m】

manggi	「後」
-mbi	未完了終止
-me	未完了連用
medege	「情報」モンゴル文語からの借用語
medehe	(同上)
mejige	「情報」medegeより古くモンゴル語より借用された語
men-	人称代名詞一人称複数除外斜格語幹 主格形 be
meng・da	「孟達」『三国志演義』の登場人物
menggun	「銀」
meng・ioi・leo	「孟玉楼」『金瓶梅』の登場人物
mergen	「賢い」
min-	人称代名詞一人称単数斜格語幹 主格形 bi, 対格形 mim-be
minggan	「千」
miyoo	「寺」
morin	「馬」
moro	「碗」
muheren	「車輪」
mujangga	「その通りだ」

muke	「水」
muse	人称代名詞一人称複数包括

## 【n】

na	「地」
nadan	「七」
nadanju	「七十」
nan・jiyūn	「南郡」地名
-ngge	形式名詞
ni	ng で終わる語のあとでの属格標識・具格標識-i の綴り ／感嘆を表す文末詞
ninggun	「六」
ninju	「六十」
nio	疑問助詞 感嘆を表す ni に諾否疑問-o が加わったもの
niongniyaha	「雁(などの鳥)」
niru-	「描く」
nirugan	「絵」
niyalma	「人間」
niyengniyeri	「春」
nofi	「～人(にん)」
non	「妹」
nure	「酒」

## 【o】

o-	「なる」	未完了否定形 ojo-rakū
----	------	-----------------

omi-	「飲む」
orin	「二十」

## 【p】

pan・gin・liyan	「潘金蓮」『金瓶梅』の登場人物
pangtung	「龐統」『三国志演義』の登場人物

## 【r】

-ra	未完了連体	母音調和によって-ra/-re/-ro と母音が変化する
-rakū	未完了否定	
-re	未完了連体	-ra 参照
-rkū	未完了否定	sa-参照
-rkūn	未完了否定疑問	sa-参照

## 【s】

sa-	「見る」, 「知る, 知っている」	未完了否定形 sa-rkū, 未完了否定疑問形 sa-rkūn
sabu-	「見える」	
saci-	「斬る」	
sahaliyan	「黒い」	『満文金瓶梅』, 『御製清文鑑』(共に 1708 年序)では「甚だ黒い」
sain	「良い」	
sakda	「老いた」	

se-	「言う」
sejen	「車」
sele	「鉄」
si	人称代名詞二人称単数
siliha	「精銳」
siliyang	「西涼」地名
sin-	人称代名詞二人称単数斜格語幹 主格形 si
sioi・šeng	「徐盛」『三国志演義』の登場人物
sirdan	「矢弾」
siren	「線」, 「脈」
siyan・fung	「先鋒」
su gurun	「蜀国」
suhe	「斧」
sun・cuwan	「孫権」『三国志演義』の登場人物
sunja	「五」
susai	「五十」
suwen-	人称代名詞二人称複数斜格語幹 主格形 suwe
sy・ma・i / syma・i	「司馬懿」『三国志演義』の登場人物
syma・joo	「司馬昭」『三国志演義』の登場人物

## 【š】

šanggiyan	「白」, 「煙」
šanyan	「白」これは乾隆年間の綴りであり『満文三国志』では用いられない
šun	「太陽」
šun dekde-re (ergi)	「太陽の昇る (方向)」
šun tuhe-re (ergi)	「太陽の沈む (方向)」

## 【t】

-ta	「ずつ」
taci-	「学ぶ」
tai·jeo hecen	「代州城」
taka-	「識別する」
takūra-	「遣わす」
takūraša-	「従える」, 「身边に使う」『満文三国志』中にこの takūraša-と いう綴りが2例, takūrša-という綴りが25例ある。
tampin	「壺」
tanggū	「百」
tasha	「虎」
te	「今」
-te	「ずつ」
teile	「だけ」
ten	「限り」
tere	「あれ」, 「あの」
toko-	「刺す」
tooda-	「返す」
tuci-	「出る」
tuhe-	「倒れる」, 「落ちる」
tulgiyen	「外」
tumen	「万」
turgun	「理由」
tuta-	「遅れる」
tuwa-	「見る」
tuwakiya-	「見張る」

## 【ts'】

ts'ai·dzung	「蔡中」『三国志演義』の登場人物
ts'ai·ho	「蔡和」『三国志演義』の登場人物
ts'oots'oo	「曹操」『三国志演義』の登場人物

## 【u】

u gurun	「呉国」
ucara-	(対格目的語と)「会う」,「遭遇する」
ucun	「歌」
udu	「幾ら」
ududu	「幾々」
ufuhu	「肺」
uihe	「角 (つの)」これは乾隆年間の綴りであり『満文三国志』では用いられない
uling	「武陵」地名
undu	「縦」
unenggi	「真に/の」
urhu-	「偏る」
uttu	「斯様な」
uyun	「九」

## 【w】

wa-	「殺す」
waka	否定辞「～ではない」, 「非なる事」
waliya-	「供える」
wargi	「西」
we	「誰」
wehe	「石」
weihe	「齒」, 「角 (つの)」
weihun	「生きた」, 「生きている」
weile	「罪」, 「事」
wesihun	「上」
wesihun fusihūn	「尊卑」

## 【y】

yabu-	「行く」, 「歩く」, 「行こう」
yabun	「行い」
yacin	「黒」, 「青黒」 黒系統の色ではあるが意味に時代差がかなりある。『満文三国志』においては通常の「黒」ではなく染料の色を差す。
yargiyan	「真実」
yung·fū·sy	「永福寺」

## 参考文献

- 愛新覺羅烏拉熙春(1985)『満語読本』呼和浩特: 内蒙古人民出版社.
- Benzing, Johannes (1955) *Die tungusischen Sprachen: Versuch einer vergleichenden Grammatik*. Wiesbaden: Franz Steiner.
- Doerfer, Gerhard (1962) *Der Numerus im Mandschu* (Abhandlungen der Geistes- und Sozialwissenschaftlichen Klasse, Jahrg. 1962, Nr. 4). Mainz: Akademie der Wissenschaften und der Literatur.
- Gorelova, Liliya M. (2002). *Manchu grammar*. Leiden: Brill Academic Pub.
- 林徹(2013)『トルコ語文法ハンドブック』東京: 白水社
- 早田清冷(2013a)「満洲語の属格一同格および連体節主語をあらわす場合」『水門 言葉と歴史』25: 172-178.
- 早田清冷(2013b)「満洲語における「黒」を表す色彩語について」『満族史研究』12:1-26.
- 早田清冷(2015)「古典満洲語の「同格の属格」について」『言語研究』147: 7-30. 日本言語学会.
- Hayata, Suzushi (2013) Some lexical differences between the first and the second half of the Manchu version of *Romance of the three kingdoms*. *Tokyo University Linguistic Papers* 34: 291-296.
- Hayata, Suzushi (2014) Skewed distribution of Manchu genitive marker in *Ilan gurun -i bithe*. *Altai Hakpo* 24: 83-92. The Altaic Society of Korea.
- 早田輝洋(1993)「満洲語文語における「取りに(連れに)来る」を意味する動詞について—『満文金瓶梅』を資料として—」『文学研究』90: 89-130. 九州大学文学部.
- 早田輝洋(1998a)『満文金瓶梅訳注』東京: 第一書房.
- 早田輝洋(2005)「満洲語の指示代名詞と指示形容詞—『満文金瓶梅』を中心に—」『満族史研究』4: 114-140.
- 早田輝洋(2006)「満洲語の繫辞と存在動詞」『語学教育フォーラム』10: 11-59. 大東文化大学語学教育研究所.
- 早田輝洋(2008)「満文三国志について」『狩野直禎先生傘寿記念 三国志論集』357-382. 東京: 汲古書院.
- 早田輝洋(2009)「満洲語の史的变化の一面—理由を表す *dahame* の用法から」『満族史研究』8: 25-44.
- 早田輝洋(2011)「満洲語の形式名詞 *ngge* と *ningge* の区別」『語学教育フォーラム』24: 115-122. 大東文化大学語学教育研究所.

- 早田輝洋 (2012) 「満洲語の n ~ Ø 交替の史的概観」 *Altai Hakpo* 22: 93-110.
- 池上二良 (1999[1979]) 「満洲語とツングース語：その構造上の相違点と蒙古語の影響」『満洲語研究』 344-358. 東京: 汲古書院 (初出: 『東方学』 58: 143-153).
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 (1996) 『言語学大辞典 術語編』 東京: 三省堂.
- 風間伸次郎 (2013a) 「テーマ企画 1: 特集「所有・存在表現」まえがき」『語学研究所論集』 18: 95-119. 東京外国語大学.
- 風間伸次郎 (2013b) 「〈特集「所有・存在表現」〉モンゴル語 (ハルハ方言・ホルチン方言) ・ブリヤート語」『語学研究所論集』 18: 237-258. 東京外国語大学.
- 岸田文隆 (1997) 『「三譯總解」の満文にあらわれた特殊語形の来源』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Kubo, Tomoyuki (1985) Internal-head relative clauses in written Manchu. 『九州大学言語学研究室報告』 6: 83-114.
- Kuroda, S.-Y. (1974) Pivot-independent relativization in Japanese I. *Papers in Japanese Linguistics* 3: 59-93.
- Kuroda, S.-Y. (1975・76) Pivot-independent relativization in Japanese II. *Papers in Japanese Linguistics* 4: 85-96.
- Kuroda, S.-Y. (1976・77) Pivot-independent relativization in Japanese III. *Papers in Japanese Linguistics* 5: 157-179.
- 楠木賢道 (2009) 『清初対モンゴル政策史の研究』 東京: 汲古書院.
- 中村雅之 (2008) 「満洲語属格助詞「i/ni」について」『KOTONOHA』 70: 1-3.  
(<http://www.for.aichi-pu.ac.jp/museum/pdf3/nakamura70.pdf> の PDF 版, 2015 年 1 月 2 日閲覧)
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』 東京: ひつじ書房.
- Matthews, P. H. (2014) *The Concise Oxford Dictionary of Linguistics*, Oxford University Press.
- Möllendorff, Paul Georg von (1892) *A Manchu grammar, with analysed texts*, Shanghai.
- Shibatani, Masayoshi (2013) What can Japanese dialects tell us about the function and development of the nominalization particle 'no'. *Japanese/Korean Linguistics* 20: 421-444.
- 園田一亀 (1991[1939]) 『韃靼漂流記』 東京: 平凡社 (初出: 『韃靼漂流記の研究』 南満洲鉄道株式会社鉄道総局庶務課発行).
- 田村建一 (1992) 「ツングース語の属格表現」 (日本言語学会第 103 回大会 研究発表要旨)

『言語研究』 101: 169-170.

時枝誠記(1950)『日本文法 口語篇』東京: 岩波書店.

時枝誠記(1954)『日本文法 文語篇』東京: 岩波書店.

津曲敏郎(1992)「所有構造と譲渡可能性: ツングース語と近隣の言語」(宮岡伯人 編)『北  
の言語: 類型と歴史』 261-278. 東京: 三省堂.

津曲敏郎(2002)『満洲語入門 20 講』東京: 大学書林.

Watanabe, Akira (1996) Nominative-genitive conversion and agreement in Japanese: A cross-linguistic  
perspective. *Journal of East Asian Linguistics* 5: 373-410.

山越康裕(2010)「ハムニガン・エヴェンキ語とハムニガン・モンゴル語の所有構造——周  
辺言語の影響とみられる特徴について」『環北太平洋の言語』 15: 101-116. 北海道大学  
大学院文学研究科.

山本謙吾(1969)『満洲語口語基礎語彙集』東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所.

吉池孝一(2008)「天聰汗錢の満文属格語尾について」『KOTONOHA』 68: 14-16

(<http://www.for.aichi-pu.ac.jp/museum/pdf3/yoshiike68.pdf> の PDF 版, 2015 年 1 月 2 日閲覧)

## 資料

『満文三国志』 ilan gurun -i bithe, 順治 7(1650)年序. パリ Bibliothèque Nationale de France 蔵本.

沈啓亮『大清全書』 daicing gurun -i yooni bithe, 康熙 22(1683)年序.

『満文金瓶梅』 gin ping mei bithe, 康熙 47(1708)年序. 東京 静嘉堂文庫蔵本.

『御製清文鑑』 han -i araha manju gisun -i buleku bithe, 康熙 47(1708)年序.

『清文啓蒙』 cing wen ki meng bithe, 雍正 8(1730)年.

『満漢合璧三国志』 雍正年間(1723 ~ 1735). 東洋文庫蔵本.

『御製増訂清文鑑』 han -i araha nonggime toktobuha manju gisun -i buleku bithe, 乾隆 36(1771)年  
序.

馮明珠 主編(2005)『満文原檔』第一冊～第十冊. 臺北: 國立故宮博物院.

国立国語研究所編(2005)『国立国語研究所資料集 15 太陽コーパス雑誌 『太陽』 日本語  
データベース』博文館新社.

## あとがき

本稿は、以下の論文の一部に加筆修正した内容を含む。

早田清冷 (2013a) 「満洲語の属格一同格および連体節主語をあらわす場合」『水門 言葉と歴史』 25: 172-178.

早田清冷 (2013b) 「満洲語における「黒」を表す色彩語について」『満族史研究』 12:1-26.

Hayata, Suzushi (2013) Some lexical differences between the first and the second half of the Manchu version of *Romance of the three kingdoms*. *Tokyo University Linguistic Papers* 34: 291-296.

Hayata, Suzushi (2014) Skewed distribution of Manchu genitive marker *-i* in *Ilan gurun -i bithe*. *Altai Hakpo* 24. 83-92. the Altaic Society of Korea.

早田清冷 (2015) 「古典満洲語の「同格の属格」について」『言語研究』 147: 7-30. 日本言語学会.

本論文執筆にあたり、林徹教授、西村義樹教授はじめ、筆者が在籍した東京大学大学院人文社会系研究科言語学専門分野の先生方、および、平成 24 年度から平成 26 年度まで日本学術振興会特別研究員として京都大学で研究に従事した際の受入研究者である田窪行則教授に、大変丁寧な御指導を頂いた。また、九州大学の久保智之教授、上山あゆみ教授には貴重なコメントを頂く事が出来た。キーワード前後文脈つき索引の作成に検索ソフトウェアとして、KIS(株)漢字情報サービス、木村展幸氏による『KIS 日本語解析システム』KisKwic for Windows を使用させていただいた。この場を借りて感謝申し上げる。

資料の電子化コーパスは『満文三国志』の全 24 巻中約 1 巻分が筆者の入力により、『満文三国志』の残りと、『満文金瓶梅』の全てが早田輝洋氏の入力による。言うまでもないことであるが本稿の全ての誤りは筆者の責任である。

2015 年 3 月 早田清冷